(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 37

鳥取県米子市

YOSHITANI ZENIGAMI

吉谷銭神遺跡 I

2001.3

財団法人　米子市教育文化事業団

序

鳥取県西部に位置する米子市は、北を日本海に臨み、西に大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代遺跡の宝庫で、歴史的にも恵まれています。特に近年では、急増する開発に伴う発掘調査によって古代の様子が徐々に明らかになってきました。

当財団では、一般国道180号道路改良事業に伴い、平成11年度に吉谷銭神遺跡の調査を実施致しました。この調査によって、縄紋時代から奈良時代にかけての集落が検出され、これまで調査事例の少なかった吉谷地域での貴重な資料を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究および教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々の埋蔵文化財への関心と理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご協力を頂きました地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対して厚く御礼を申し上げます。

平成13年3月

財団法人　米子市教育文化事業団

理事長　森田隆朝

例　　言

1．本書は「一般国道180号道路改良事業」に伴い、平成11年度より２ヵ年にわたって鳥取県米子市吉谷で実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査は、鳥取県からの委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団、埋蔵文化財調査室が実施した。
3．調査は、財団法人米子市教育文化事業団主任平木裕子、調査員佐伯純也が担当した。
4．本書に用いた方位は座標北を示し、座標値は国土座標第Ⅴ系を用いた。
5．自然科学分析については、(株) 古環境研究所に委託した。
6．基準点測量、地形測量、空撮は、(株) ワールドに委託した。
7．石器実測については、一部を (株) 岡三リビックに委託した。
8．出土遺物の番号は、本文、図、表、写真とも対応している。
9．本書は、佐伯が執筆、編集した。

現地調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々からご教示を得ました。記して感謝致します。(敬称略)

穴澤　義功　井上　智博　内田　浩文　岡野　雅則　門脇　威　北浦　弘人
国田　俊雄　桑原　久男　坂本　裕一　竹広　文明　辻　信広　中森　祥
西尾　克己　根鈴　輝雄　濱　隆造　濱田　竜彦　早田　勉　廣田　佳久
堀口　譲　森岡　秀人　森田　結城　山内　紀嗣　山田　康弘　山本　忠尚
湯村　功

目　　次

序
例　言
目　次
第1章　発掘調査の経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　第3節　調査の組織 …… 1
第2章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第1節　遺跡の位置 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 2
第3章　調査の経過 …… 4
　第1節　調査区の設定 …… 4
　第2節　調査の方法 …… 4
　第3節　調査区の堆積 …… 7
第4章　検出した遺構と遺物 …… 8
　第1節　縄紋時代の遺構と遺物 …… 8
　第2節　弥生時代の遺構と遺物 …… 10
　第3節　古墳時代の遺構と遺物 …… 21
　第4節　奈良時代の遺構と遺物 …… 24
　第5節　遺構外出土遺物 …… 42
第5章　まとめ …… 52
　第1節　縄紋時代の遺構と遺物 …… 52
　第2節　弥生時代の遺構と遺物 …… 53
　第3節　奈良時代の遺構と遺物 …… 53
第6章　自然科学的分析 …… 55
　第1節　吉谷銭神遺跡における火山灰分析 …… 55
　第2節　吉谷銭神遺跡における放射性炭素年代測定 …… 62
　第3節　吉谷銭神遺跡における花粉分析（0区西断面）…… 63
　第4節　吉谷銭神遺跡における花粉分析（不明遺構2）…… 65

第1章　発掘調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

本調査は、鳥取県によって進められている一般国道180号道路改良事業に伴う、米子市吉谷銭神遺跡の記録保存を目的としたものである。平成11年10月に鳥取県より工事予定地内における遺跡の有無について、照会を受けた米子市教育委員会は、事前の試掘調査を実施し、工事予定地内における埋蔵文化財の存在を確認した。これを受けて鳥取県は米子市教育委員会と協議し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を実施することとなった。

第2節　調査の経過

現地調査は、平成12年1月より着手した。地形測量及び表土剥ぎを実施した。伐採や土止めフェンスの設置が積雪によって遅れたため難航したが、同年3月31日に調査を終了した。調査終了後には、現地説明会を開催し、一般市民に遺跡の概要を説明した。平成12年度には、検出した遺構や出土した遺物の整理作業を進め、報告書の作成事業を行った。

第3節　調査の組織

発掘調査は下記の体制で行われた。

平成11年度

調査主体　財団法人米子市教育文化事業団
　理事長　森田隆朝（米子市長）
　専務理事　山岡　宏（米子市教育長）
　事務局長　清間　勉

埋蔵文化財調査室
　室　長　森田禎二
　次　長　深田政幸
調査担当　主　任　平木裕子
　調査員　佐伯純也
　臨時職員　森田静香
　　福嶋昌子

平成12年度

調査主体　財団法人米子市教育文化事業団
　理事長　森田隆朝（米子市長）
　専務理事　山岡　宏（米子市教育長）
　事務局長　清間　勉

埋蔵文化財調査室
　室　長　古前勝茂
　次　長　矢倉紀夫
調査担当　主　任　平木裕子
　調査員　佐伯純也
　臨時職員　森田静香
　　福嶋昌子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

吉谷銭神遺跡は、鳥取県米子市吉谷に所在する縄紋時代から奈良時代にかけて営まれた集落遺跡である。米子市は、鳥取県の西部、日本海側に面する人口14万人、面積100キロ平方メートルの都市である。米子市の地形は、市の東部を北流する日野川によって形成された米子平野、弓ヶ浜半島、砂丘海岸地帯と大山山麓の丘陵地、中国山地から伸びる山塊によって構成されている。吉谷地区は、米子市の南西部、西伯郡西伯町との境に位置し、北に加茂川によって形成された平野を臨み、南には母塚山からのびる山地が続いている。現在は、遺跡の東隣を国道180号線が南北に走っている。吉谷の地形は、鳥取県と島根県の県境にある母塚山から伸びる丘陵と谷によって形成され、小規模に開析された谷と平野を控えた都市近郊型農村の景観をなしている。

第２節　歴史的環境

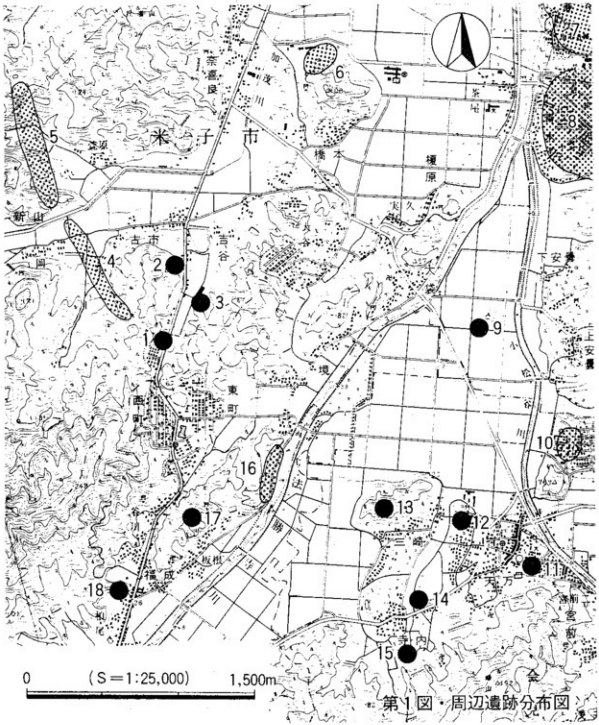
米子平野では、これまでのところ旧石器時代から縄紋草創期における遺跡は、陰田宮の谷遺跡3区、奈喜良遺跡（6）、諸木遺跡（10）において、槍先形尖頭器が検出されているほかは不明瞭な状況である。縄紋時代には、前期の土器が目久美遺跡、晩期の土器が奈喜良遺跡、古市河原田遺跡（4）、青木遺跡（8）で確認されている。

弥生時代には、前期の土器が吉谷トコ遺跡（3）、吉谷上ノ原山遺跡（2）、新山山田遺跡などで見つかっている。また前期の環濠集落が清水谷遺跡（18）、諸木遺跡（10）で確認されている。後期には遺跡の数が増加する一方、集落の規模が縮小傾向にある。

古墳時代には、前期に日原６号墓が築かれるほか、会見町の普段寺１号墳から三角縁神獣鏡が出土している。前期の集落は、会見町天万土井前遺跡や、米子平野の中心的集落である青木遺跡に見られる。中期には、三崎殿山古墳、東宗像古墳群などが営まれ、集落では、該期の須恵器が多量に出土した長砂第三遺跡や会見町の宮尾遺跡（12）などが知られる。後期には、境古墳群、福成古墳群などの群集墳が形成される一方、横穴墓が出現し、葬儀形式の広がりを窺わせる。

飛鳥、奈良時代には新山下山遺跡、青木遺跡、奥谷堀越谷遺跡、東宗像遺跡などが知られている。これらの多くは丘陵の斜面をテラス状にカットした平坦面に一棟から数棟の掘建柱建物を建てるもので、出土する遺物などから、工房的な色彩が強いと考えられている。

平安時代の遺跡は、検出例が少なく、経塚や墳墓など特徴ある遺跡に少数例見られるにすぎない。近年の調査によって、米子城跡の下層や、錦町第一遺跡から黒色土器の出土が見られるほか、陶磁器を含まない遺跡も散発的に発見されており、今後の実態解明が待たれる。



第1図・周辺遺跡分布図

遺跡名一覧表

1・吉谷銭神遺跡	2・吉谷上の原山遺跡	3・吉谷トコ遺跡	4・古市遺跡群
5・新山遺跡群	6・奈喜良遺跡	7・福市遺跡	8・青木遺跡
9・大袋丸山遺跡	10・諸木遺跡	11・天万遺跡	12・宮尾遺跡
13・三崎殿山古墳	14・天萬土井前遺跡	15・寺内8号墳	16・福成早里遺跡
17・春日山古墳	18・清水谷遺跡		

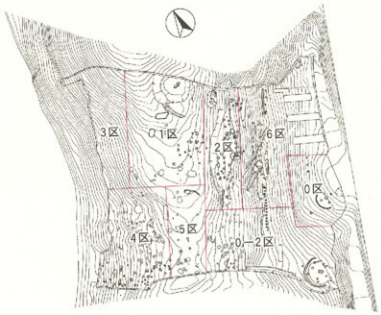
第３章　調査の経過

第１節　調査区の設定

調査区は、調査の進行状況と地形によって任意に区画を設定し、順次、尾根上から調査を開始した（第２図）。また、排出された土砂については、当初予定していた土量を超え、場内での保管ができなくなったため、急遽排出された土砂を搬出するためのトラックヤード（０区、０－２区）を設け、この地点の調査を優先させた。

第２節　調査の方法

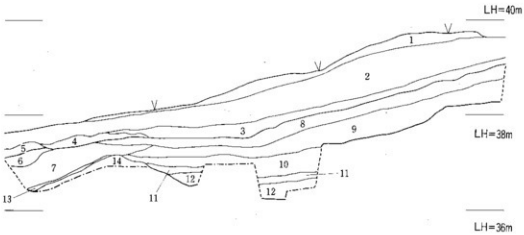
調査は、人力によって表土を除去した後に、一輪車、ベルトコンベアーによって、土砂を移動させ、バックホー、ダンプカーによって場外に移動させた。遺物の取り上げは、調査区ごとに出土した土層を記録し番号を付けた。遺構の実測は、20分の１を基本として、全体の遺構図を作成し、調査区の地形測量については、測量会社に委託した。本報告書では、一部調査段階の遺構名を変更し、新たに遺構名を付けている。



第２図・調査地区割図

不明遺構2
柵列2
竪穴住居3
溝状遺構1
土器溜り2
テラス状遺構
土坑2
掘立柱建物1
掘立柱建物3
柵列3
土坑1
溝状遺構2
掘立柱建物2
柵列1
竪穴住居1
土器溜り1
掘立柱建物5
土坑3
不明遺構1
掘立柱建物4
竪穴住居2
0
10m

第３図・調査区全体図



1 表土　2 黒色砂質土　3 黒灰色砂質土
4 淡黒色砂質土　5 暗黒色砂質土　6 明黄褐色砂質土
7 明黄色砂質土（白色砂粒を多く含む）　8 暗茶色砂質土
9 淡茶色砂質土　10 黄色粘質土
11 黄色粘質土（赤色粘土塊を多く含む）　12 明黄色粘質土
13 白色粘土　14 赤褐色粘土

第4図・0－2区南断面図

0 (S=1:40) 2m

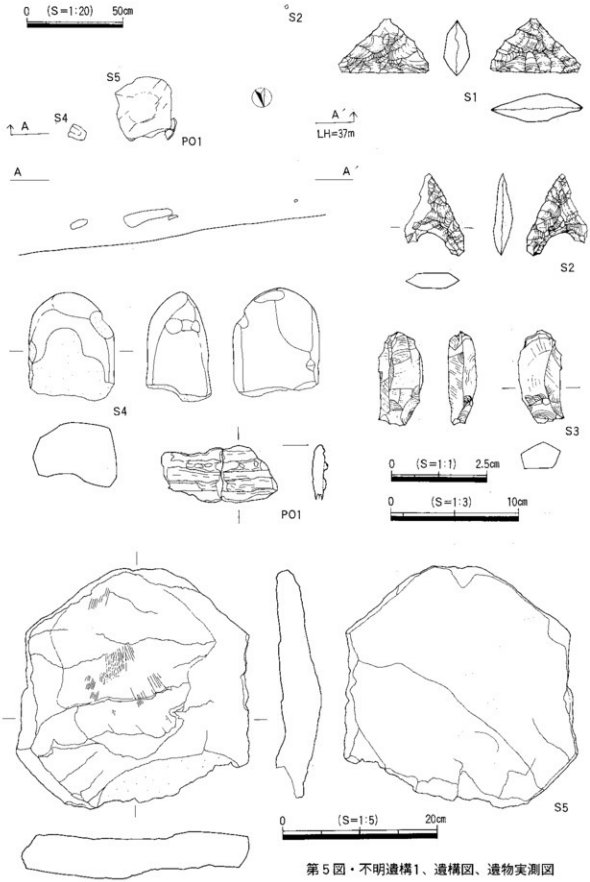
第3節　調査区の堆積

調査区の堆積は、1区から4区の尾根上においては、数センチから20センチメートルと浅く、表土を剥ぐとすぐに地山となった。西側の斜面も同様に、堆積土は浅いが、深い所では50センチを超える地点もあった。調査区の東側、2区、0－2区は、表土の下層に黒色土が堆積していた。また調査区の南東部（0－2区）では、黒色土の下層に火山灰を主としたローム層が良好に遺存している事実をつきとめたため、地山層を3メートルにわたって掘り下げ、テフラ分析を実施した。調査区南西側では、地山である赤褐色粘質土が落ち込み、変わって白い粒を多く含むキナコ状の淡黄色砂質土が堆積していた。遺物は、表土上面から黒色土中に集中して認められたほかは、黒色土の下層土、地山層中からは遺物の出土は見られなかった。

第４章　検出した遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

不明遺構１（第５図）０－２区において黒色土を除去した後、地山検出面から土器、石器類がややまとまって出土した。石皿（S5）は、長さ32,0cm、幅30,7cm、厚さ5,2cmで、中央部が摩滅し平滑になっている。磨石（S4）は石皿の西に20cm離れた地点から出土した。一部破損しており、残存長8,5cm、幅6,7cm、厚さ5,1cmで、断面形は、やや角張っている。土器（Po1）は、石皿（S5）の直下から出土した。口縁部の外面直下に２条の粘土帯を貼り付け、細かな刺突がめぐる。色調は褐色を呈し、胎土はやや粗く、砂粒を含む。一見すると隆帯紋土器に類似している。そのほか石器は、石鏃が２点、楔形石器が１点出土している。遺構の性格については不明。遺構の時期は、出土した土器から縄紋早期から前期にかけてと見られる。



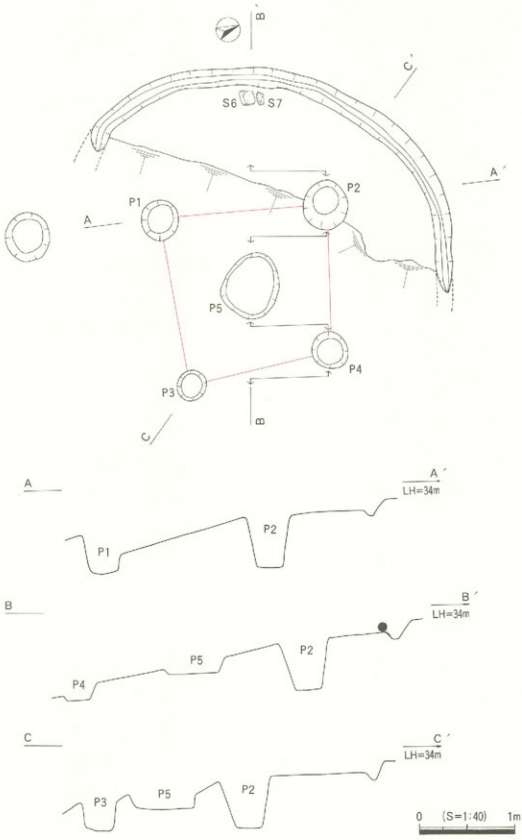
第５図・不明遺構1、遺構図、遺物実測図

第２節　弥生時代の遺構と遺物

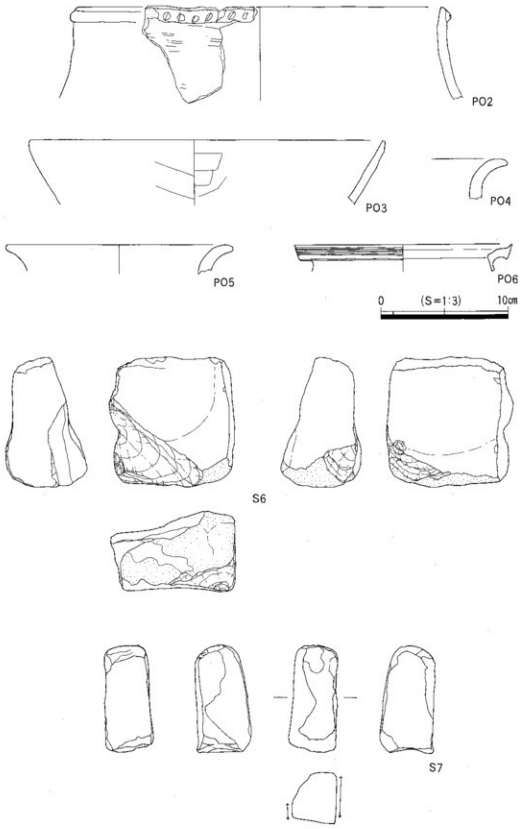
弥生時代の遺構は、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、土器溜りを検出した。このうち土坑については、柱穴と考えられるものや、貯蔵穴、落し穴状のものなど400基以上を検出した。それらの遺構の詳細については時期、性格ともに不明のものが多いため紙幅の都合から割愛した。

竪穴住居跡１（第６、７図）竪穴住居跡１は、０区斜面部で黒色土を除去した後の地山面で検出した。大半の遺構が流出しており、埋土には後世の遺物なども混入していた。住居の形態は、直径４ｍ程度の円形と見られ、周囲に幅20cm、深さ10cmの周溝が廻る。検出した柱穴は４基で、残存状況の良いもので、直径40cm、深さ60cmを測る。住居の中央部には、直径60cm程度のピットが穿たれている。これらのピットについては、埋土中に炭化した木片が少量含まれていたほかには出土遺物は見られなかった。この住居に伴う遺物は、住居西側の周溝寄りの床面に砥石が２個並べて置かれていた。S6は砥石で、縦13,3cm、横13,6cmの正方形を呈する。中央部は使用により窪む。S7は長方形の砥石で、２面に擦痕がみられる。時期については、この住居に確実に伴う遺物がなく不明だが、掘り下げ中に出土した遺物から弥生時代中期末以降に埋没したものと考えられる。

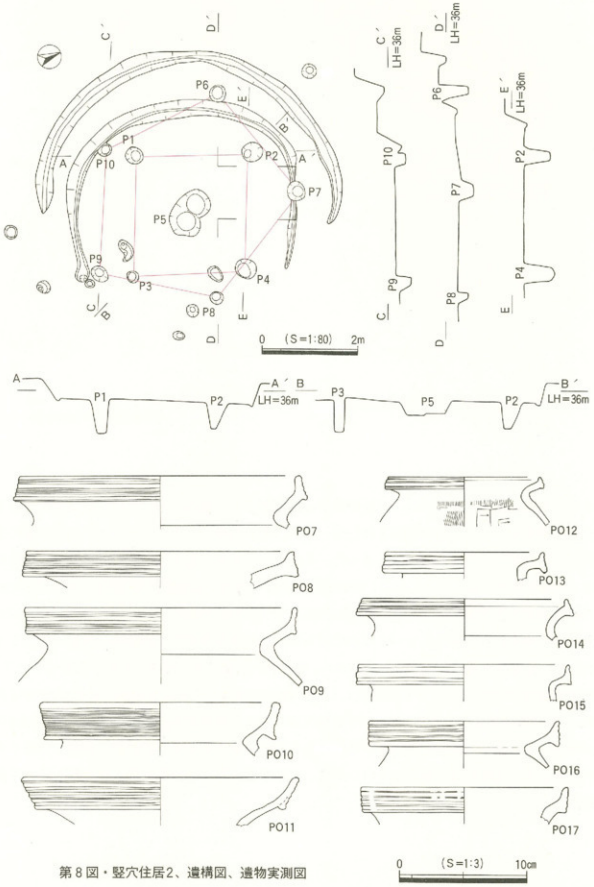
竪穴住居２（第８、９図）竪穴住居２は、０－２区の南端で検出した。遺構は地山である褐色粘土を掘り込んで作られており、２時期の切り合いが認められた。当初は完全な形で検出したが、その後削平されてしまったため、上層の住居の床土をほとんど除去した段階で柱穴を確認した。住居跡内の埋土は分層し難い黒色砂質土の単一土層であったが、断面の観察から下層の住居が古く、上層の住居が新しいものであると判断した。上層の新段階の住居跡は、直径６ｍ程度の円形を呈し、深さ20cmの溝が廻る。柱穴は５基で、中央ピットについては明らかにできなかったが、検出状況から古段階の住居の中央ピットと切り合っているものと考えられ、当初から存在していた可能性が高い。下層の竪穴住居は、直径4,5mの円形で、深さ10cm程度の周溝が廻る。柱穴は4基あり、残存の良いもので直径30cm、深さ70cmを測る。中央には直径60cm、深さ30cmのピットが存在する。出土遺物は、埋土中から土器、石器が出土した。土器は甕の出土量が多いが、壺や器台(高坏)形土器も少量含まれる。甕は口縁部の形状がバラエティーに富み、Po12のような頸部内面直下までヘラ削りが及ばないものも出土している。この住居の時期については、新段階の住居が弥生後期前葉頃、古段階の住居はそれよりも若干古いものと考えられる。



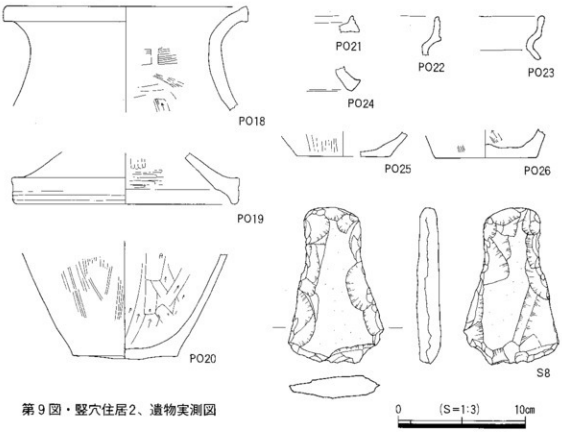
第6図・竪穴住居1、遺構図



第7図・竪穴住居1、遺物実測図

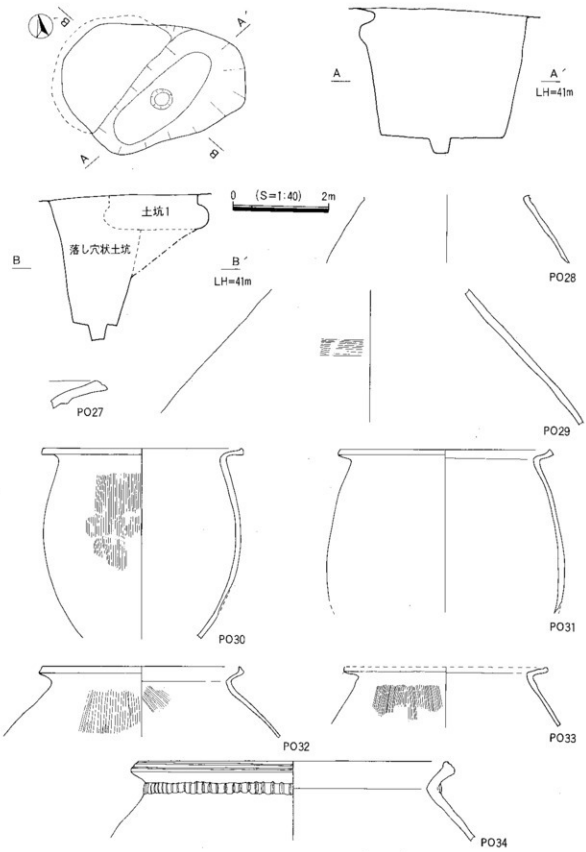


第8図・竪穴住居2、遺構図、遺物実測図

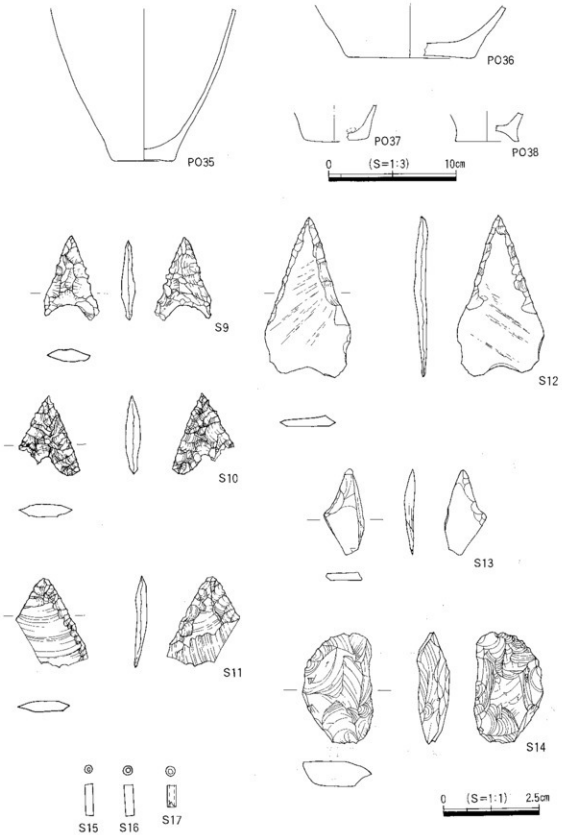


第９図・竪穴住居２、遺物実測図

土坑（第10、11図）土坑１は、５区の尾根上に位置する。検出当初から円形と長楕円形の２基の土坑が切り合っているのが確認されたが、検出作業に失敗したため、円形の土坑は周囲の袋状の掘り込みを留めるのみとなってしまった。このため２基の土坑を一括して報告する。円形の土坑は、長楕円形の土坑を切っており、断面形は袋状を呈する。推定開口径120cm、底部径140cmで、深さ40cm程度と推定される。埋土は暗褐色砂質土で、遺物は土器片、黒曜石、サヌカイトの石鏃、管玉２点が出土した。埋土については全て持ち帰り、水洗作業を行った結果、さらに管玉を１点検出した。遺構の時期は、出土した土器から、弥生時代中期とみられる。土坑の性格については、断面形が袋状を呈することから貯蔵穴としての機能が考えられる。また落し穴状の土坑は長辺170cm、短辺推定長１m、深さ130cmの平面楕円形を呈し、底部中央には直径20cm、深さ15cmの柱痕がある。この落し穴状の土坑内部からは遺物の出土が見られなかったため、時期、性格ともに不明であるが、形態的な特徴と切り合いから、弥生時代中期中葉以前に作られた落し穴の可能性が高い。



第10図・土坑1（落し穴状土坑1）、遺構図、遺物実測図



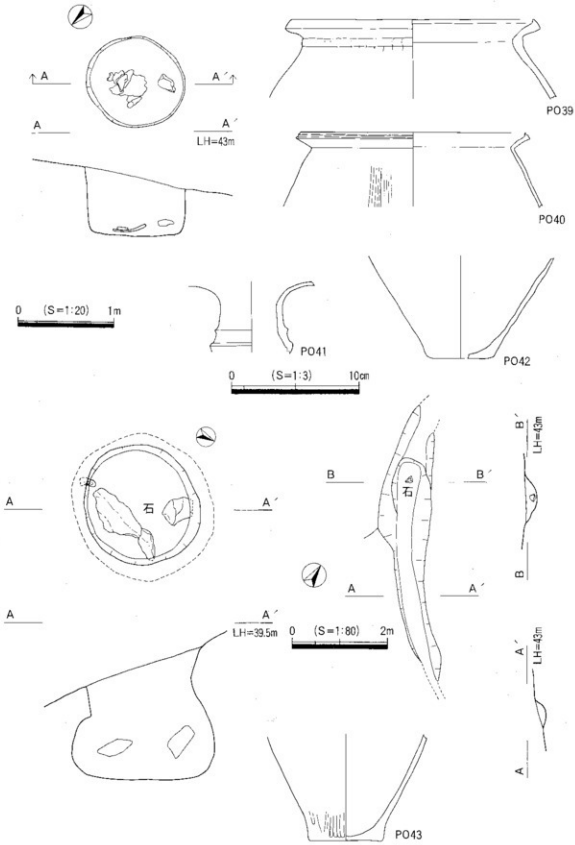
第11図・土坑1（落し穴状土坑1）、遺物実測図

土坑２（第12図）土坑２は、１区の尾根部、溝状遺構１の南西に位置する。直径50cm、深さ35cmの円形の土坑である。土坑の内部からは土器片が出土した。Po39、Po40は甕で、Po39は、口縁端部が上方に肥厚する。また頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。po41は壺形土器の頸部片とみられる。全体に風化して調整は不明であるが、肩部に２条の突帯が巡る。この遺構が埋められた時期は、出土した遺物から弥生時代中期後葉と推定される。遺構の性格については不明である。

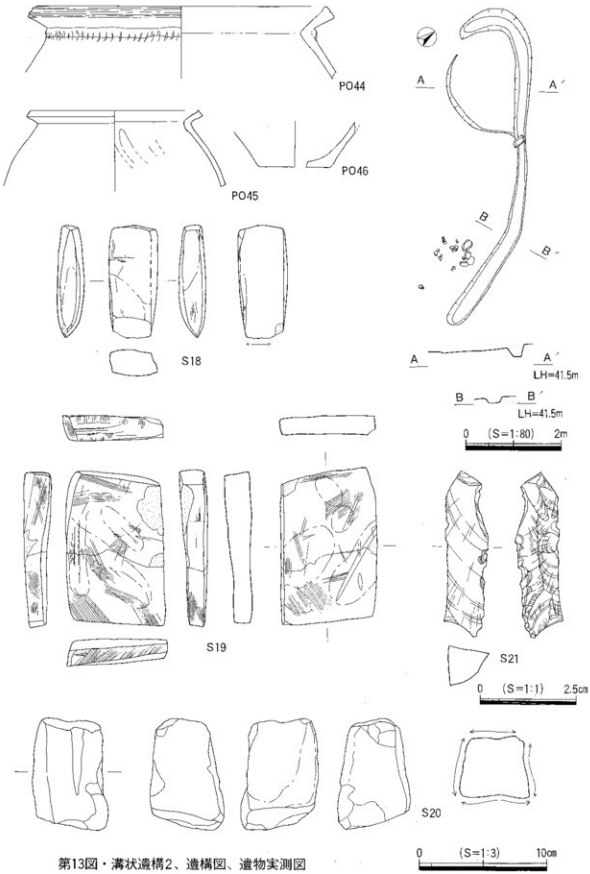
土坑３（第12図）土坑３は０－２区の斜面に位置する。断面形が袋状を呈する土坑で、開口部の直径55cm、底部径80cm、深さ60cmである。土坑の底面からやや浮いた位置で数個の角礫を検出した。土坑内からは土器細片がいくつか出土している。この土坑の性格は形態的な特徴から貯蔵穴と考えられる。時期は、土坑内から時期を決定できる遺物が出土しなかったため不明である。

溝状遺構１（第12図）溝状遺構１は、残存する長さ約６m、幅１mで、平面形はやや弧状にカーブしている。断面形は緩やかな「U」字形を呈し、深さは約30cm程度である。また遺構の北側は、古墳時代の不明遺構２に削られているものと見られるため、掘削された当初はもう少し長い溝であったと考えられる。遺物は、埋土の下層から弥生土器の底部（Po43）と角礫が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代のものと考えられる。また遺構の性格については不明である。

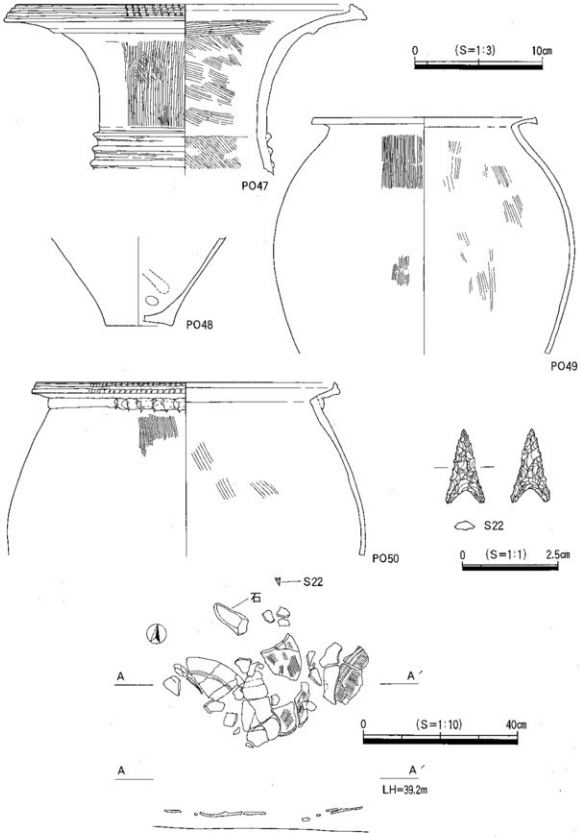
溝状遺構２（第13図）溝状遺構２は、５区の中央部尾根上の平坦面で検出した。この地点は堆積土が薄く、表土から20cmほどですぐに地山となった。このため本遺構は、後世の撹乱によって大半が削られているものと考えられる。検出した遺構の長さは約3,5m、深さは10cm程度で、平面形は「し」字状に伸び、中央部を角礫で閉じている。遺物は、溝の南側上面から土器と石器が集中して見つかった。土器Po44、Po45は甕で、Po44は頸部に指頭圧痕貼付突帯が巡る。石器はS18、S19、S20がまとまって出土した。S18は磨製石斧で、全長8,9cmある。S19は砥石で長方形を呈し6面に擦痕がみられる。S20も砥石で、4面に擦痕がみられる。遺構の性格については不明だが、溝を隔てた北側からはほとんど遺物が出土しなかったことから、竪穴住居の壁溝の可能性が考えられる。ただし周囲には柱穴状のピットがみられないため、性格については断定できない。本遺構の埋没時期は、出土した遺物から、弥生時代中期中葉後半から中期後葉と考えられる。



第12図・土坑2、3、溝状遺構1、遺構図、遺物実測図



第13図・溝状遺構2、遺構図、遺物実測図



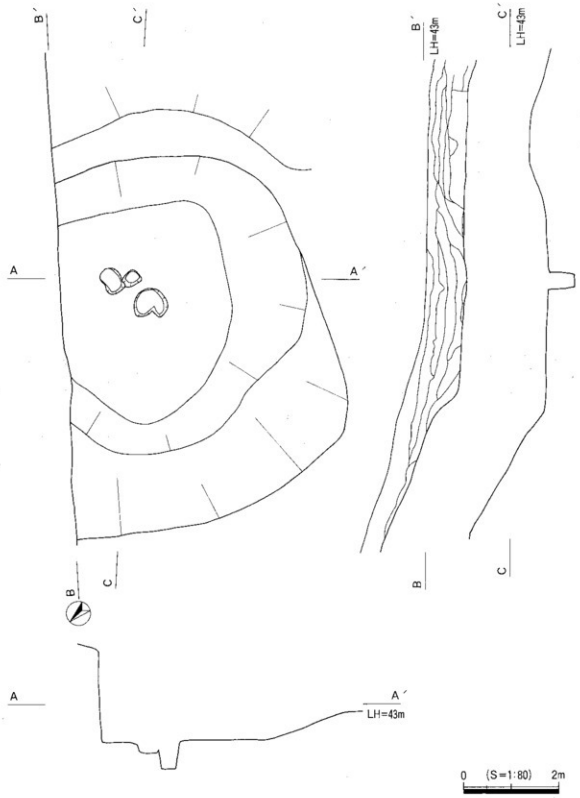
第14図・土器溜り1、遺構図、遺物実測図

土器溜り１（第14図）０－２区で黒色土を掘削中に検出した。黒色砂質土中位において、３個体ほどの土器と黒曜石製の石鏃がまとまった状態で出土した。これに伴う遺構は検出できなかった。ここから出土した土器は全て弥生土器である。Po47は口縁部がラッパ状に大きく開く壺で、内外面ともハケ調整を施す。口縁端部は、やや上方に拡張し、凹線と刺突紋を施す。口縁部外面下部に１条、頚部に３条の突帯が巡る。Po49、Po50は甕で、Po50は頚部に指頭圧痕貼付突帯が巡る。遺構の性格については不明だが、出土した遺物が完形に復元できないことから、別の場所で破損した土器をこの地点に投棄した可能性が考えられる。遺物の時期は、壺、甕の特徴から弥生時代中期後葉と推定される。

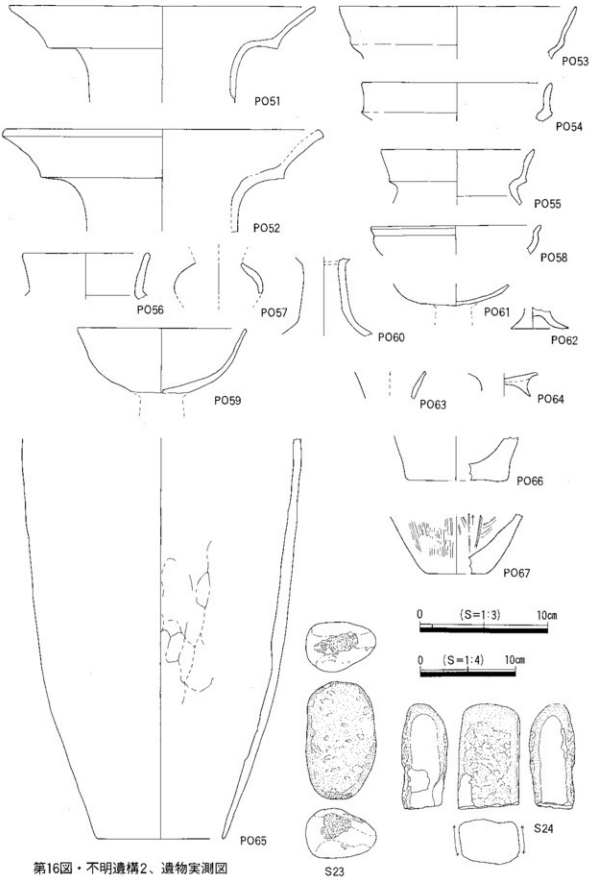
第３節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、１区北側の尾根部から池状に落ち込んだ遺構を検出した。遺構の一部は調査区外に広がるものと考えられる。

不明遺構２（第15、16図）１区尾根上の南端部を直径６ｍ、深さ80㎝ほど丸く掘り下げ、斜面部の周囲を土手状に２ｍほど掘り残して池状の窪地を作る遺構である。内部は、ピット状の掘り込みを3基検出したほか、底面から土器、石器が出土した。
遺構の性格については、立地や形態的な特徴から古墳の周溝の可能性が考えられる。また古環境研究所に依頼した花粉分析の結果（67頁）から、この遺構は常時帯水していたとは考えにくいことから、貯水する池としての機能は低いものと考えられる。



第15図・不明遺構2、遺構図

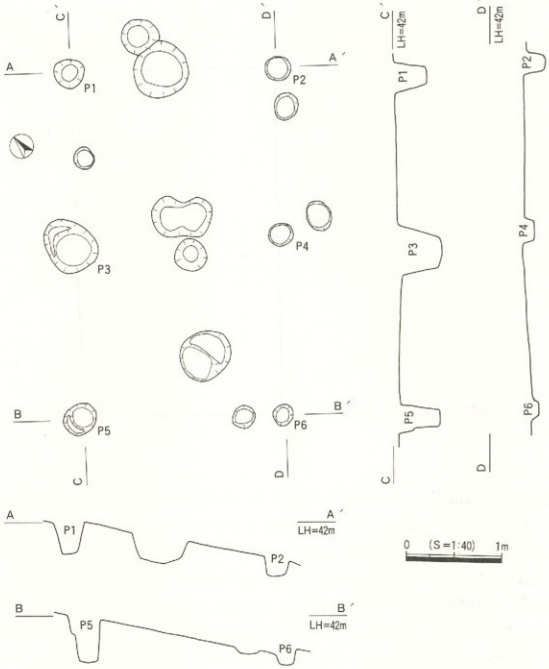


第16図・不明遺構2、遺物実測図

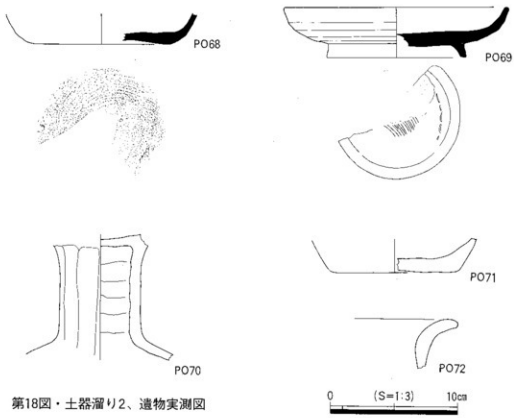
第４節　奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構は、１区尾根上、２区テラス状遺構１及び、その下部の柵列、４区のピット群が中心となる。テラス１は、標高40m付近に位置し、長辺25m、短辺４ｍで、斜面に接する東側はほとんど流出し、造成当初の形態を保っていない。また検出した建物跡などの時期は、直接時期決定できる遺物が出土していないが、包含層から出土した遺物から、この集落の機能した期間が奈良時代後半から平安時代初頭頃と推測したことから、建物跡もこの時期に含まれるものと理解している。

掘立柱建物１（第17図）１区の尾根部平坦地に位置する。１間×２間の建物跡である。梁行2,2m、桁行3,7mで、主軸はN-35°-Eである。東側は削平されているため柱穴が浅くなっている。P4から土師器細片が出土している。建物跡の北東部に土器溜り２が近接する。

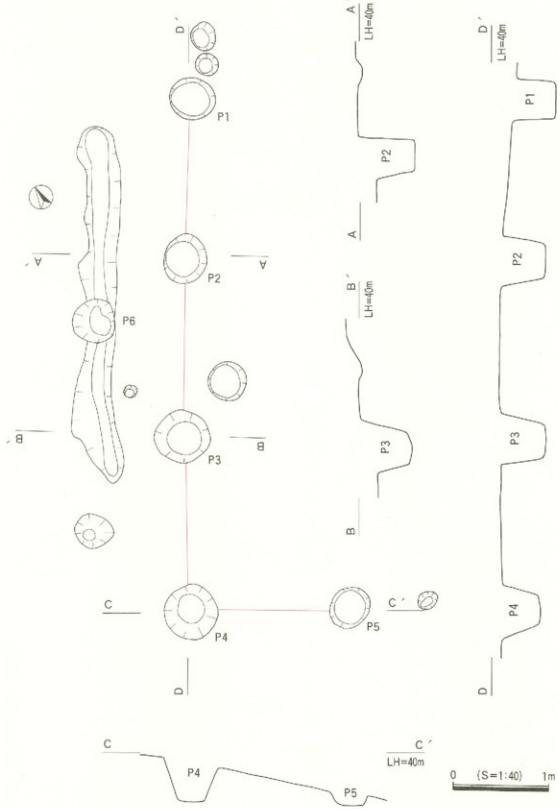


第17図・掘立柱建物1、遺構図

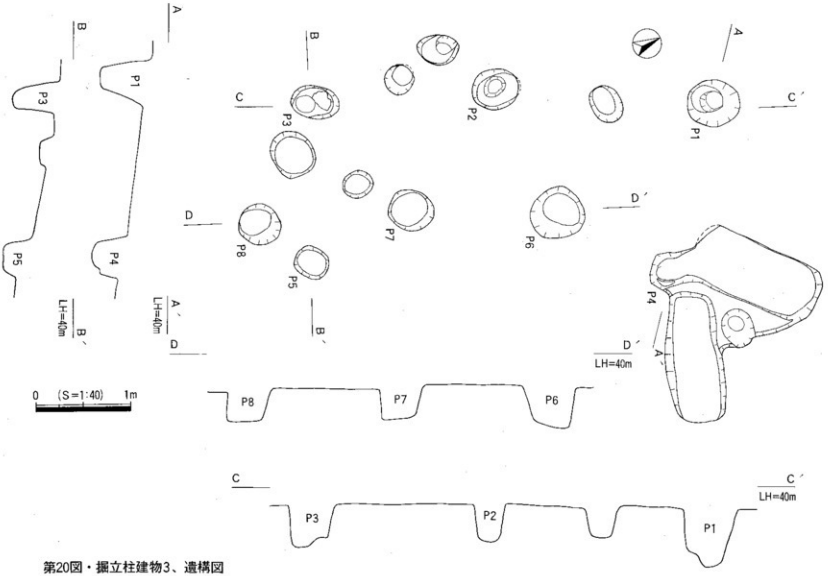


第18図・土器溜り2、遺物実測図

土器溜り2（第18図）1区の斜面上に位置する。表土直下の黒色土中から土器数個体分がまとまって出土した（写真図版8－1）。出土状況にまとまりがないこと、土器は全て破損していたことから、破損したものがこの地点に投棄されたものと考えられる。Po67は須恵器の坏底部とみられる。底部には糸切の痕跡を留める。Po69は須恵器皿である。底部に高台をもつ、いわゆるB類である。高台は「ハ」字状に外反する。底部には糸切の痕跡と高台を貼り付けた内面に爪形の圧痕が巡る。Po70は土師器高坏もしくは高盤の脚柱部である。外面は風化が著しいが、丹塗りの痕跡がみとめられる。内面には輪積みの痕跡が明瞭に残り、外面は面取りによって整形している。本遺構の埋没時期は、出土遺物から、奈良時代後半以降と考えられる。



第19図・掘立柱建物2、遺構図

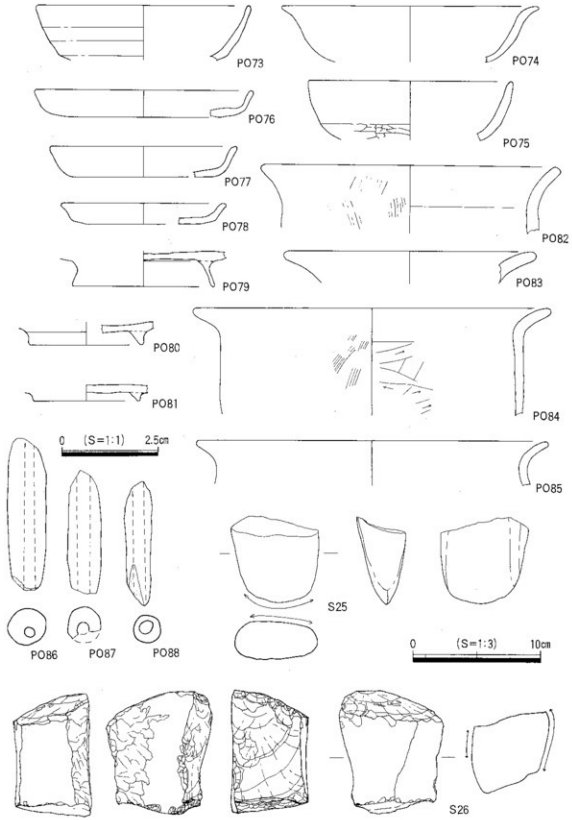


第20図・掘立柱建物3、遺構図

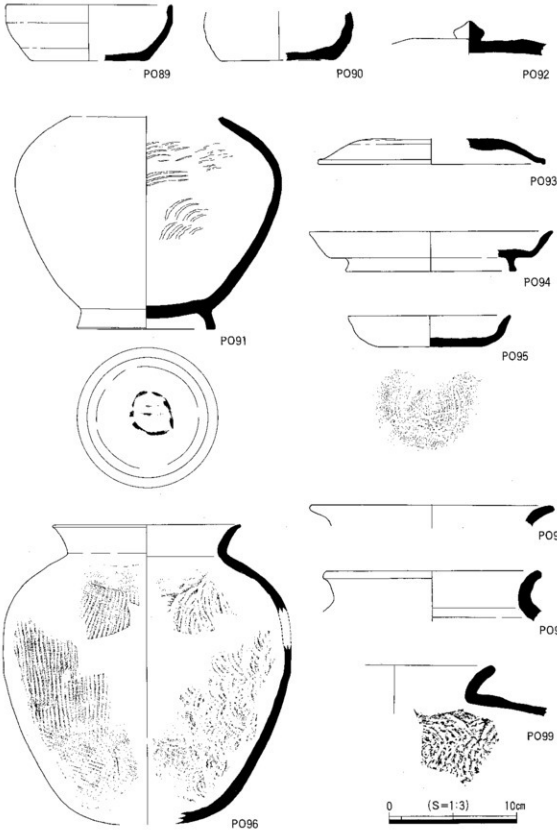
掘立柱建物２（第19図）テラス１の南側に位置する。テラスの流出によって東側の柱穴を失っている。検出規模で１間×３間の建物跡。梁行1,7m、桁行5,4mで主軸はN-34°-Eである。建物の東辺に長さ3,8mに渡って、雨落痕状の溝が平行する。建物の主軸方向に平行に伸びることから、雨粒によって穿たれた雨落溝と考えられる。この雨落溝からは、須恵器坏身片Po90が出土している。

掘立柱建物３（第20図）テラス１の中央に位置する。テラスの流出によって東側の柱穴を失っている。検出規模で１間×２間の建物跡。梁行1,7m、桁行4,3mで、主軸はN-26°-Eである。またこの建物跡に切り合う３基の柱穴からなる柱列が見られる。柱間は1,6mで、柱穴の規模は直径0,5m、深さ0,3～0,4mを測る。柱穴の規模から掘立柱建物３と同様の建物跡の可能性も考えられる。

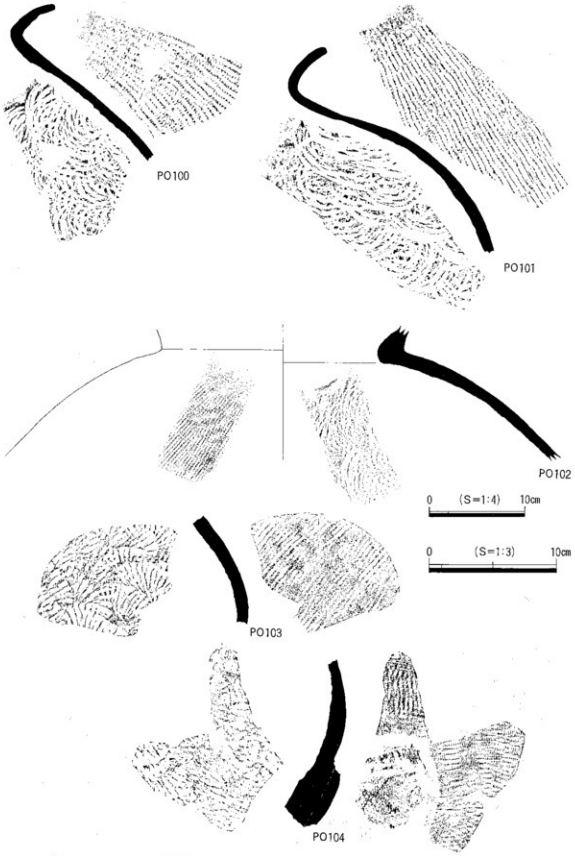
テラス１出土遺物（第21図～第25図）このテラス１からは、上層の表土から下層の遺構検出面において多数の遺物が出土した。主な出土遺物は、土師器、土錘、須恵器、石斧、砥石である。土師器は坏、皿、鉢などの飲食器、甕などの煮炊具が出土した。土師器坏Po73は口径16,4cmで内外面に丹塗りの痕跡を留める。Po74、Po75は鉢か。Po74は大きく外反する口縁を持つ。Po75は口径15,9cmで、底部外面をヘラケズリによって調整している。高台の付く土師器坏はPo79、Po80、Po81である。Po79は高台部が大きく「ハ」字状に伸びる。須恵器は坏、坏蓋、皿、壺、甕が出土している。蓋Po92は、宝珠つまみを持つタイプである。Po93は、やや平坦な天井部と口縁端部にかなり退化した返りをもつものである。壺Po91は「短頸壺」か。やや肩の張るプロポーションで、内面にはナデ消し損ねた当て具の痕跡が残る。また底部に墨書がみられる。甕Po103、PO104はいずれも体部内面に放射線状の当て具痕が残るものである。宍道湖、中海沿岸地域ではまれに見られるタイプである。



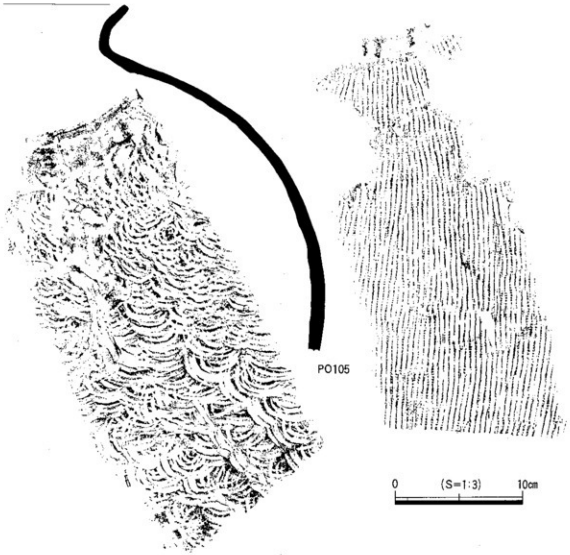
第21図・テラス1遺物実測図1



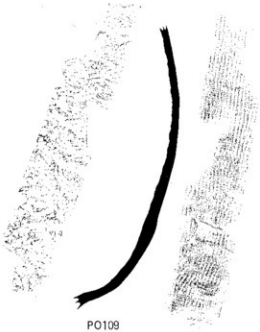
第22図・テラス1遺物実測図2

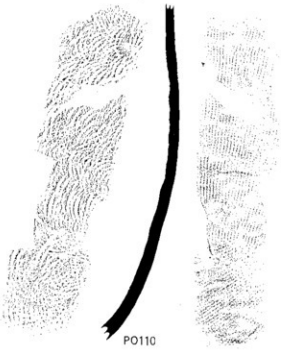


第23図・テラス1遺物実測図3

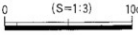


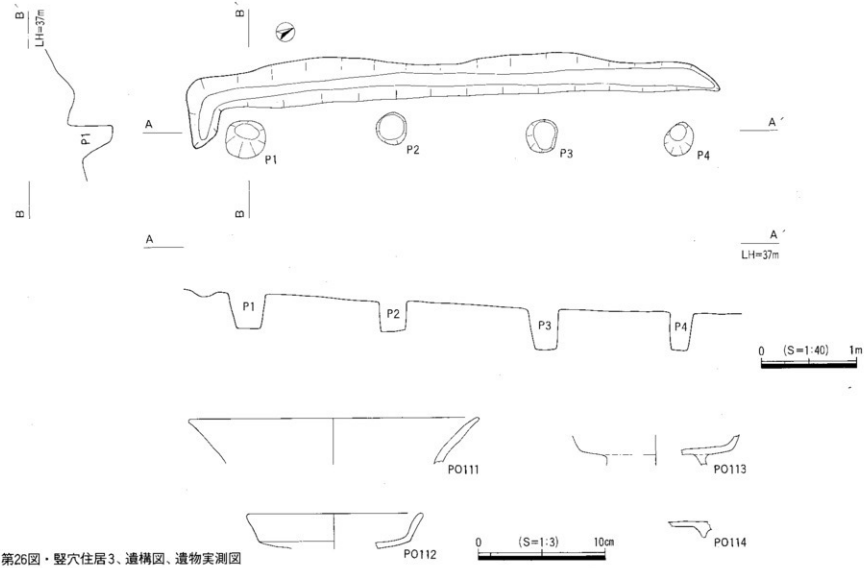
第24図・テラス1遺物実測図5





第25図・テラス1遺物実測図

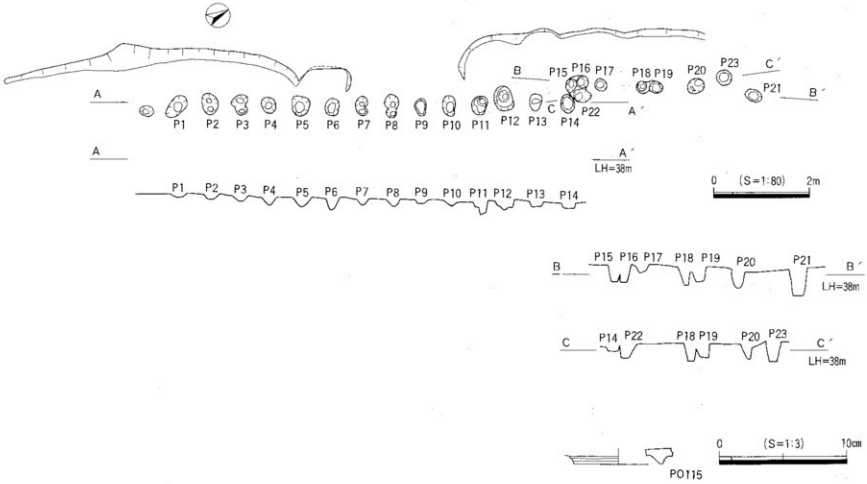




第26図・竪穴住居3、遺構図、遺物実測図

竪穴住居３（第26図）６区の北部斜面に位置する。４基の柱穴とそれに平行する溝状の遺構である。大半が流出して現状をとどめていない。そのため竪穴式住居と断定する根拠は乏しいが、柱穴列に平行する溝を住居の壁溝と考え、竪穴住居とした。ここからは土師器の細片が出土している。遺構の時期は、遺物から奈良時代後半期と考えられる。

構列１（第27図）６区から０－２区の標高37m付近の地点に位置する。14基のピットが直線に並ぶ遺構である。当初は道路状遺構の痕跡の可能性も考慮したが、掘り方が浅いこと、突き固めたような跡は見られなかったことからテラス１に伴う構列とした。時期は出土遺物から、奈良時代後半頃と考えられる。


A
A´
B
B´
C
C´
P1 P2 P3 P4 P5 P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12 P13 P14 P15 P16 P17 P18 P19 P20 P21 P22 P23
LH=38m
0 (S=1:80) 2m
0 (S=1:3) 10cm
PO115

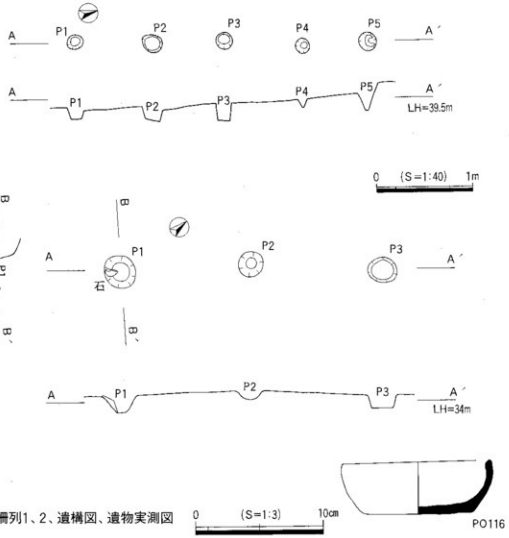
第27図・柵列1、遺構図

柵列2（第28図）2区のテラス1の北端部で検出した。5基のピットからなる柵列である。柱間が80cm、ピットの直径が大きいもので約20cm、深さが20cm程度とごく小さいことから、テラス1に伴う小規模な柵列とみられる。遺物は出土していないが、テラス1の遺構面で検出したことから奈良時代後半以降に作られたものと考えられる。

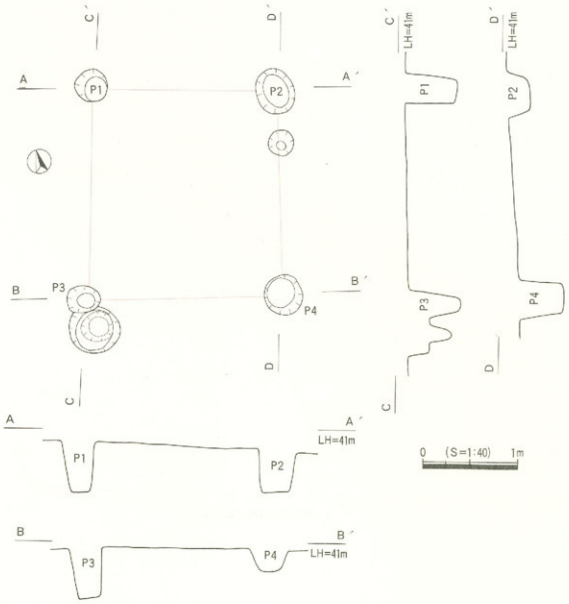
柵列3（第28図）0区の北側で検出した3基のピットである。これに並列する柱穴が見られないことから、建物跡ではなく柵列とした。柱間は2,7mで主軸はN-38°-Eである。中央部のピットから須恵器坏身Po116が完形で出土している。この遺構の埋没時期は奈良時代後半と考えられる。

掘立柱建物4（第29図）5区の調査区南部で検出した。1間×1間の掘立柱建物跡である。梁行2,0m、桁行2,2mで、主軸はN-20°-Eである。

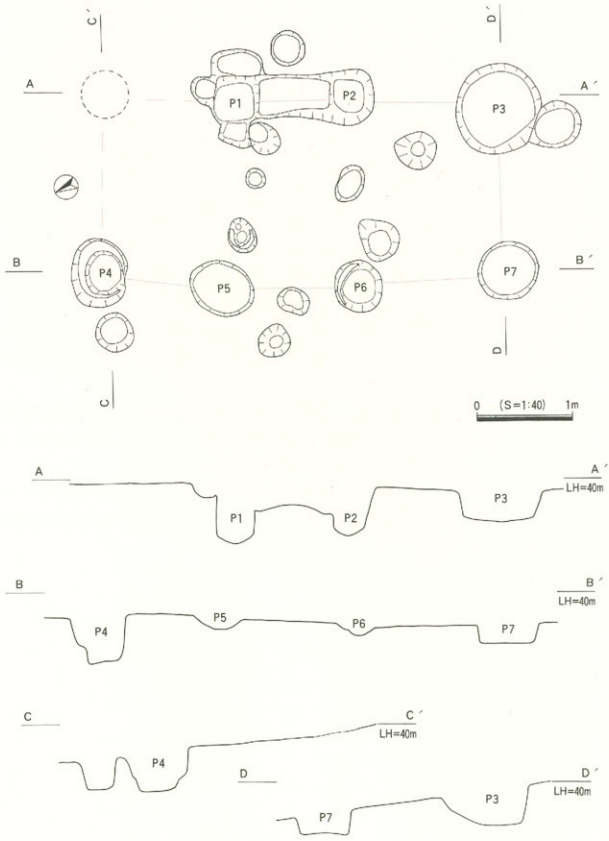
掘立柱建物5（第30図）4区の傾斜面で検出した。1間×3間の掘立柱建物跡である。建物の北東部の柱穴は、大木の根によって撹乱されており、検出することが出来なかった。また柱穴の規模や深度にまとまりがみられないが、整然と七基のピットが並ぶ位置的関係から建物跡と考えた。梁行2,0m、桁行4,3mで主軸はN-28°-Eである。出土遺物は、図化できなかったが、ピット内から須恵器の細片が出土している。



第28図・柵列1、2、遺構図、遺物実測図　0 (S=1:3) 10cm



第29図・掘立柱建物4遺構図



第30図・掘立柱建物5遺構図

第５節　遺構外出土遺物（第31～40図）

遺構に伴わない遺物は、表土、黒色土を掘削する過程で出土したものである。

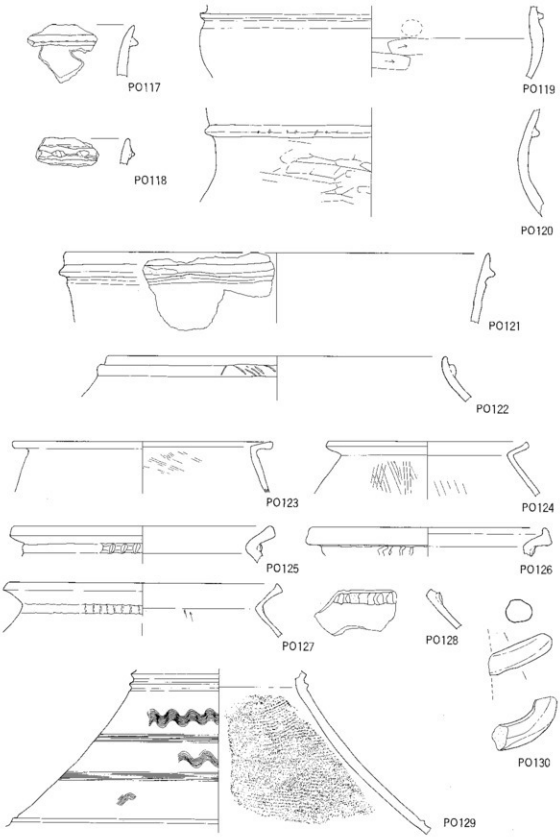
1．突帯紋土器　数は少ないものの０区、０－２区を掘り下げ中に数点出土している。Po117は口縁端部からやや下がった所に突帯が付き、細かな刺突が巡る。Po118も同様だが、刺突はやや粗い。

2．弥生土器　中期中葉から後期にかけての遺物が出土している。Po129は壺の肩部で、突帯によって区画された内面にさらに波状紋と櫛描紋によって紋様を施す。Po130は水差し形土器の取っ手部か。

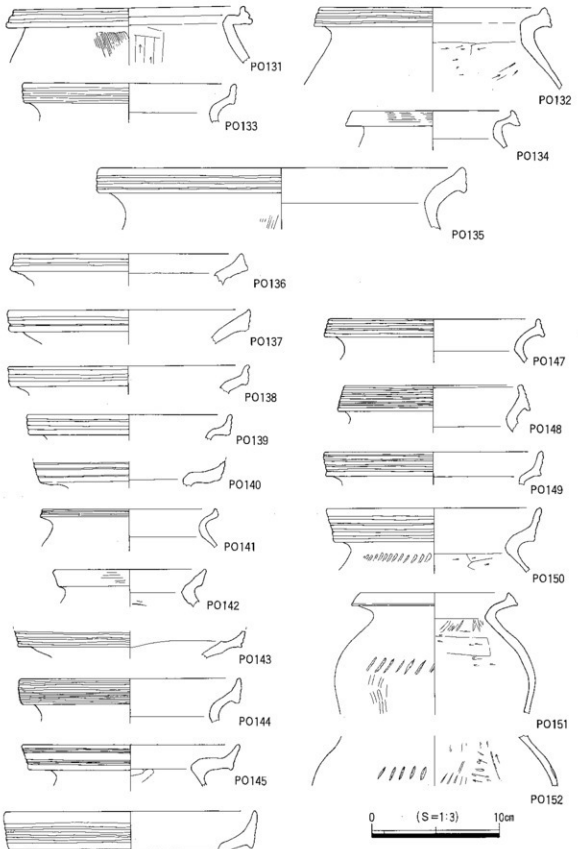
3．土師器　口縁部が二重口縁を呈する古墳時代のものと、奈良時代以降のものがある。また古墳時代のものは風化が著しく調整など読み取れないものが多い。Po181は外面に竹管状のスタンプ紋が施される。小片のため器種は不明である。Po184～Po186は高台の付く坏身底部とみられる。どちらも高台部はみな高いタイプである。Po187は皿蓋とみられる。暗紋などは見られないが、内外面とも丹塗りを施す。また口縁端部は退化した返りが付く。Po188は鉢である。内外面とも丹塗りを施し、底部外面はヘラケズリによって調整する。Po224はやや大型の移動式竈である。

4．須恵器　Po227～Po235は須恵器坏身である。Po227～Po232は糸切の底部に口縁端部が屈曲するタイプである。吉谷銭神遺跡での主体となる遺物である。Po238～Po240は鉢である。口縁端部が大きく内傾するPo241、Po242は鉄鉢形土器であろう。

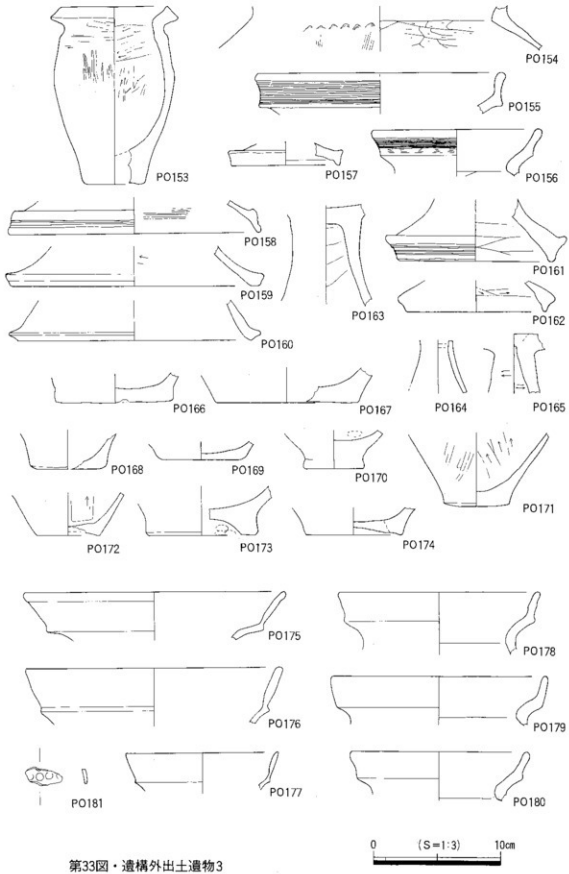
5．石器　S27は尖頭器もしくは石鏃の先端部と考えられる。S28は黒曜石製のスクレイパーである。石材の表面は風化が著しい。S31～S35は石鏃である。S39は磨製石剣の先端部。S40は刃器状の石器である。



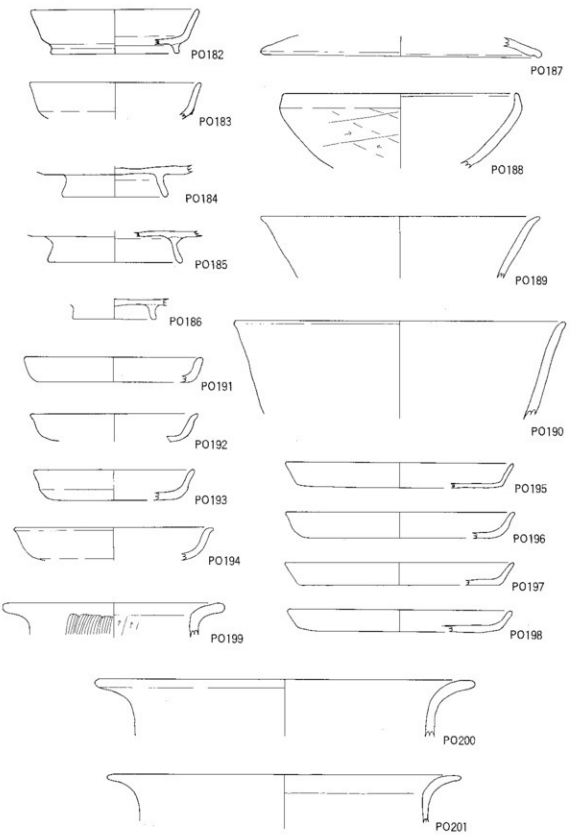
第31図・遺構外出土遺物1



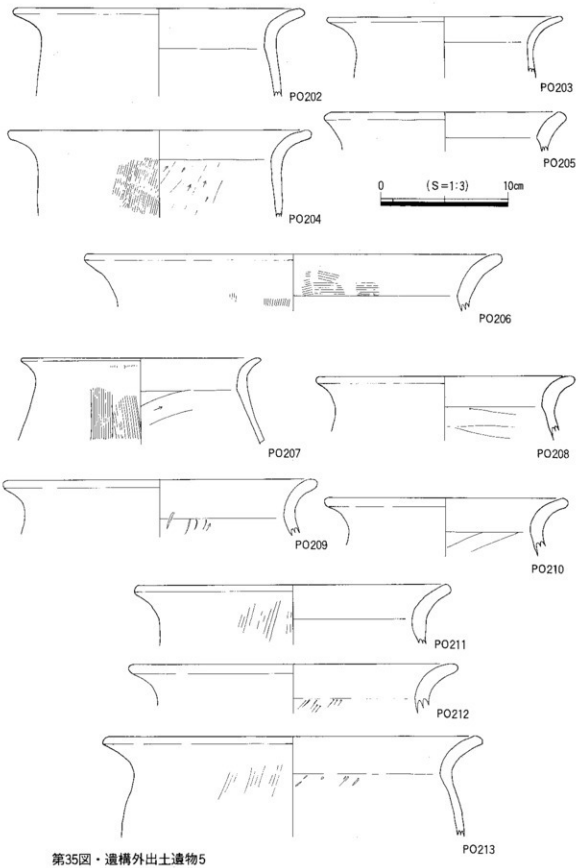
第32図・遺構外出土遺物2



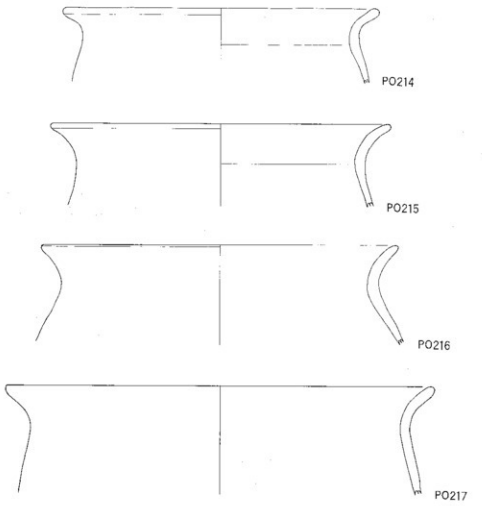
第33図・遺構外出土遺物3



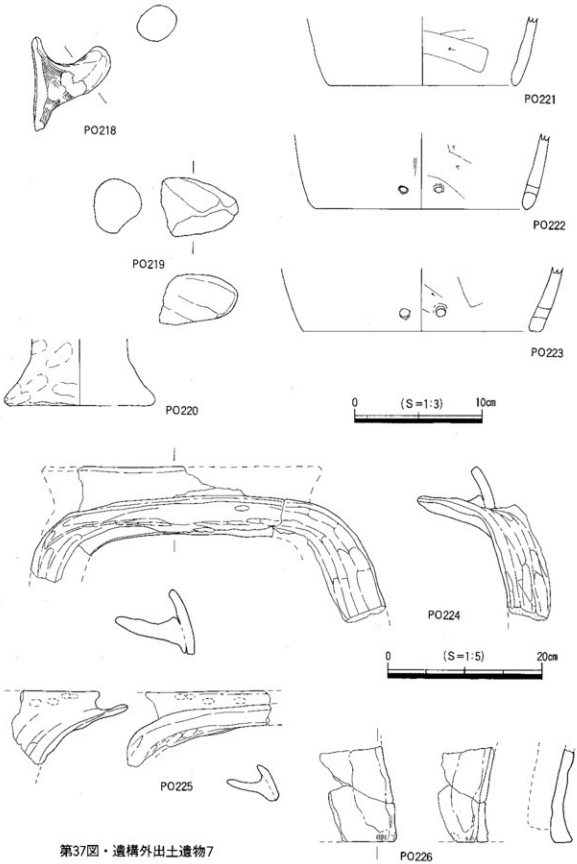
第34図・遺構外出土遺物4



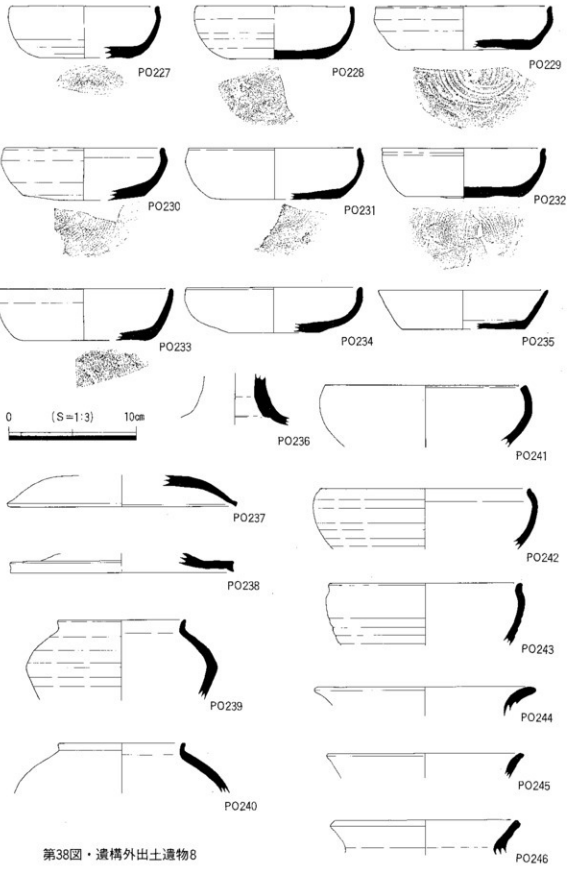
第35図・遺構外出土遺物5



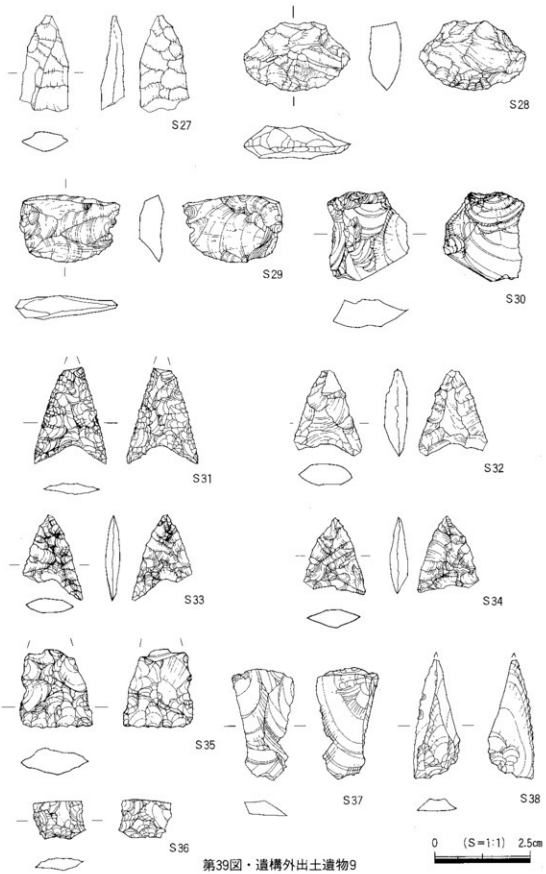
第36図・遺構外出土遺物6



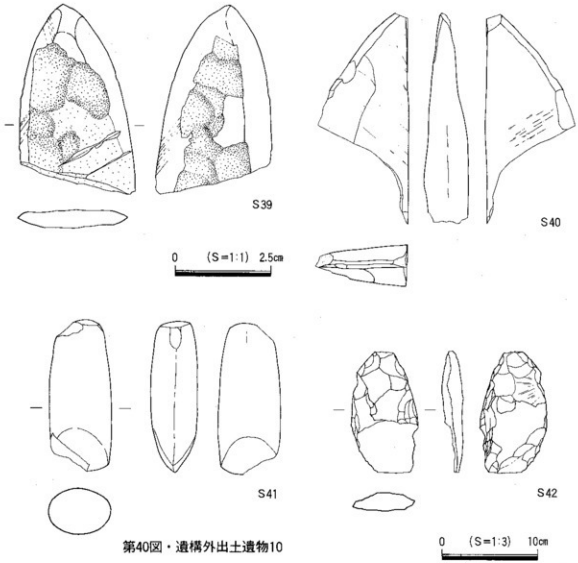
第37図・遺構外出土遺物7



第38図・遺構外出土遺物8



第39図・遺構外出土遺物9



第40図・遺構外出土遺物10

第5章 ま と め

第1節 縄紋時代の遺構と遺物

今回の調査では、縄紋時代の遺構、遺物が少数ながら認められた。石皿と土器が出土した不明遺構1は、黒色土を除去した地山層の直上で検出した。周囲には黒曜石片の散布が認められたほかに遺構は検出できなかった。ここから出土した土器（Po1）の型式は、不明確ながら早期末から前期初頭にかけての長山式に並行するものと考えた。テフラ分析の結果からも黒色土最下層にアカホヤのピークが存在することから年代的な矛盾は生じないものと考える。その他の成果としては、0－2区の南側断面において実施したテフラ分析の結果からAT、阿蘇、アカホヤ、三瓶など広域火山灰の存在が明らかとなったことである。これによって大山西麓地域においてもテフラ分析が有効となる指標を得たことは今後の調査研究の課題として重要であろう。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居、土坑、溝状遺構、土器溜りである。弥生時代の遺物は、尾根部から東南側、０－２区の斜面部で多く出土した。遺構に伴うものは少ないが、弥生時代中期中葉から後期にかけての遺物が認められる。石器資料として、砥石の出土が目立った。特に溝状遺構2から出土した砥石（S-19、20）は、磨製石斧（S-18）と共伴しており、土器の年代観から弥生時代中期中葉の新段階に相当するものと思われる。竪穴住居2は、2時期の切り合いがあり、古段階の住居が、中央ピットを持つ４本柱建物で、復元床面積が約12㎡を計る。新段階の住居は、復元直径６ｍで、５本柱建物となり、床面積は約28㎡となる。このような平面多角形の住居は、青木遺跡など東山陰地方に顕著に分布しており、地域的特徴として注意される。土坑１は、落し穴状の土坑と切り合っており、一部検出に失敗したが、形態的特徴から貯蔵穴とした。内部から出土した、管玉は共伴した土器から、弥生時代中期中葉に属するものと考えられる。このような小形の管玉は長瀬高浜遺跡の弥生時代前期土坑墓に出土例があり、周辺地域での類例が注目される。

第３節　奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺物は、須恵器、土師器、土錘、砥石、鉄滓が出土した。このうち、須恵器は、飲食具として坏、皿、鉢が、貯蔵容器として、壺、甕がみられる。坏については、高台を持つＢ類とそれに伴う蓋Ｂがある。また、底部が糸切後未調整のまま体部が伸び、口縁端部が外方へ屈曲する坏は、これまでに島根県の大井窯跡で生産されていたことが明らかとなっている。このタイプの坏の流通範囲は、出雲地方から、伯耆地方全域に分布している。伯耆国では、須恵器窯跡の調査が行われていないため不明だが、胎土分析の結果から、大井窯跡領域の須恵器群が、一定量流通していることが陰田遺跡群の調査により明らかになっており、少なくとも西伯耆では出雲部と同様の消費圏内にあったことが分かる。そのほか、皿については、Ｂ類に高台部内面に爪形の圧痕を残すものがあった。このような特徴を持つものは、鳥取県内では類例が見当たらないが、島根県では松江市の黒田畦遺跡ＳＫ12から須恵器皿底部内面に爪形の刺突痕が廻るものが１点出土している。こういった爪形の刺突痕を持つ須恵器は、高台部を貼り付けた後に施されるもので、北近畿、但馬地方に認められる技法であり、平城宮跡でも出土例がある。胎土分析を実施していないが、近畿北部地方との交流を示唆するものかもしれない。蓋については、宝珠つまみを持つものが一点だけみられるほか、口縁端部の返りが退化したものがほとんどを占める。坏の出土量と比較しても圧倒的に少ない。壺については、器種の中でＫ類が欠落するほか、提瓶、鐙を欠く。墨書が見られた壺は、「短頸壺」壺Ａ類とみられ、一部内面にナデ消し損ねた当て具の痕跡が残る。また、須恵器の高坏、高盤類は見られなかった。土師器の器種構成は、飲食具、煮炊具であり、丹塗りされた皿が目立つ。皿は口径と器高の比率から少なくとも２種類に大別可能と考える。

また、高台を持つ皿Ｂ類も出土している。特記すべきものとして、面取り整形する高坏高盤の脚柱部が出土しているが、米子平野ではこのタイプのものは、上福万遺跡に出土例がある。煮炊具では、甕、甑の取手部、大型の移動式竈、土製支脚が出土している。吉谷銭神遺跡の出土遺物の年代観は、出土した土師器の食器類において、暗紋を施すものが見られないこと、少数ながらも退化した須恵器蓋を持つことと、須恵器皿Ｂ類の存在から、奈良時代後半から平安時代初頭に相当するものと思われる。

一点だけ出土している墨書文字の解釈については、漢数字の「二」を書いて、ややいびつな「○」で囲むものと思われるが、「目」という文字として成立する可能性も否定できないと考える。類例としては、墨書ではないが、出雲国分寺出土資料から「㊀」に近い形態のヘラ記号が見られるほか、出雲国庁から「少目」の墨書が出土している。文字の解釈としては、国庁四等官の「目」（さかん）が候補となるが、吉谷銭神遺跡は、伯耆国庁とは遠隔な位置にあり、両者を結びつける根拠は希薄であることから、文字の解釈について、現段階では「食器を管理するための備品番号」とするのが妥当であろう。

鉄滓については、穴澤義功氏に全点観察していただき、種類、磁着度、メタル度についてご教示をいただいた。その観察結果については一覧表に記載している。また氏の観察によって、吉谷銭神遺跡出土の鉄滓は製錬系の滓は含まれておらず、鍛冶系の滓と含鉄のものが主体となること。鍛冶は精錬鍛冶が主体で、鍛錬鍛冶も行われていることが判明した。また吉谷銭神遺跡の北方に位置する陰田遺跡群の出土鉄滓と比較すると、陰田では製錬系の遺物が２割前後入っていたが、吉谷銭神遺跡では見られないこと、新山の精錬滓は専業化された工房で作られて滓も大きかったが、吉谷銭神遺跡では全て小さめである点が明らかとなった。

最後にこれら遺構、遺物から遺跡の性格について考えると、鉄滓と砥石の出土から、小規模な鍛冶工房の存在が推定されることと、検出された建物跡、出土遺物に飲食器が多く認められることから、テラス１を中心とする集落遺跡と考えられる。また集落を画する構列を検出したことは、これまで短期的に工房などに使用されていたと考えられてきたテラス状遺構の性格を考える上でも重要な視点を提供したものと考える。

第６章　自然科学的分析

第１節　吉谷銭神遺跡における火山灰分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

鳥取県西部米子市域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、大山、三瓶など中国地方に位置する火山のほか、九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、吉谷銭神遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺物の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、調査区南壁西地点、調査区南壁西地割れ地点、調査区南壁東地割れ地点、調査区南壁東地点の４地点である。

２．土層の層序

（１）調査区南壁西地点

調査区南壁西地点では、表層部の腐植質土壌をよく観察することができた。ここでは、下位より若干黄色がかった褐色土（層厚20cm）、褐色土（層厚31cm）、暗灰褐色土（層厚26cm）、黒灰褐色土（層厚16cm）、黒色土（層厚23cm）、黒褐色土（層厚25cm）、暗褐色土（層厚42cm）、灰褐色土（層厚５cm）が認められる（図１）。発掘調査では、黒褐色土から弥生時代の遺物が検出されている。

（２）調査区南壁西地割れ地点

調査区西地割れ地点では、調査区南壁西地点で認められた土層のすぐ下位にある土層をよく観察することができた。ここでは、下位より若干褐色がかった黄色土（層厚15cm以上）、赤色風化礫を多く含む褐色砂質土（層厚16cm，礫の最大径28mm）、赤色風化礫を含む黄褐色土（層厚21cm，礫の最大径18mm）、若干黄色がかった褐色土（層厚27cm）、褐色土（層厚９cm以上）が認められる（図２）。これらのうち、上位より２層目の若干黄色がかった褐色土が、調査区南壁西地点の最下位の若干黄色がかった褐色土に対比される。

（３）調査区南壁東地割れ地点

調査区東地割れ地点でも、表層部の腐植質土壌の下位の土層をよく観察することができた。ここでは、下位より黄褐色土（層厚25cm）、黄色土（層厚15cm）、黄灰色土（層厚19cm）、黄色土（層厚17cm）、若干灰色がかった褐色土（層厚18cm）、暗灰褐色土（層厚25cm）、黒灰褐色土（層厚13cm）が認められる（図３）。

（4）調査区南壁東地点

調査区南壁東地点では、調査区西地割れ地点や調査区東地割れ地点で認められた土層よりもさらに下位にある土層が認められた。ここでは、下位より赤色土（層厚5㎝以上）、白色粘質土（層厚4㎝）、黄色軽石層（層厚44㎝，軽石の最大径4㎜）、下位の黄色軽石に富む黄灰色土（層厚31㎝，軽石の最大径3㎜）、灰褐色土（層厚12㎝）、暗灰色土（層厚24㎝）、灰褐色土（層厚6㎝）が認められる（図4）。

3．火山ガラス比分析

（1）分析試料と分析方法

調査区南壁西地点および調査区南壁西地割れ地点において、基本的に厚さ5㎝ごとに採取された試料のうち、5㎝おきの試料を中心とした27点を対象に火山ガラス比分析を行い、火山ガラス質示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

1）試料15ｇを秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）分析篩により、1/4-1/8㎜の粒子を篩別。

5）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別比率を求める。

（2）分析結果

調査区南壁西地点および調査区南壁西地割れ地点における火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図5と図6に示す。また、結果の内訳を表1に示す。調査区南壁西地点では、いずれの試料からも火山ガラスを検出することができた。火山ガラスの多くは、透明なバブル型（平板状）である。このタイプの火山ガラスは、さほど顕著ではないものの、本地点においては試料33に出現ピーク（3.6％）があるようにみえる。また試料21から試料13にかけては（試料15を除く）、ほかに淡褐色や褐色のバブル型ガラスが少量（0.4％）ずつ認められる。したがって、試料21あるいは試料19付近に淡褐色や褐色のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

調査区南壁西地割れ地点では、試料11を除くいずれの試料からも火山ガラスが検出された。火山ガラスの多くは、透明なバブル型である。本地点では、調査区西地点において透明なバブル型ガラスの出現ピークが認められた試料33より下位にあたる土層からも同様な火山ガラスが検出されたことから、透明なバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準は、本地点の試料17以下の層準にあると推定される。ここでは、ほかに試料7や5に、繊維束状に発泡した透明な軽石型ガラスが少量ずつ認められた。

4．テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

調査区南壁東地割れ地点において、基本的に5㎝ごとに採取された試料のうち、5㎝おきを中心とした8点を対象にテフラ検出分析を行い、示標テフラの降灰層準の定性的な把握を試みた。分析の手順は次の通りである。

1）試料15gを秤量。
2）超音波洗浄により泥分を除去。
3）80℃で恒温乾燥。
4）実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表2に示す。ここでも、少量ながらいずれの試料からも透明なバブル型ガラスが検出された。とくに、最下位の試料15では、ほかに淡褐色のバブル型ガラスが認められた。

5．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、テフラ層および火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準がある可能性が考えられた4試料について、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率の測定を行った。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を、表3に示す。調査区南壁西地点の試料33に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.501（mode:1.500）である。重鉱物としては、普通角閃石やカミングトン閃石がごく少量含まれている。調査区南壁西地点の試料19に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.513（modal range:1.509-1.512）である。重鉱物としては、普通角閃石やカミングトン閃石がごく少量含まれている。

調査区南壁西地割れ地点の試料17に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.497-1.501（modal range:1.499-1.501）である。重鉱物としては、普通角閃石やカミングトン閃石がごく少量含まれている。また、調査区南壁東地点の試料1には、普通角閃石やカミングトン閃石さらに黒雲母が含まれている。普通角閃石とカミングトン閃石の屈折率（n_2）は、各々1.670-1.676と1.659-1.663である。

6．考察ー示標テフラとの同定

吉谷銭神遺跡においてテフラ分析の対象となった土層のうち、最下位付近にあると考えられる調査区南壁東地点の試料1の軽石層は、含まれる重鉱物の組合せ、とくにカミングトン閃石が含まれること、普通角閃石やカミングトン閃石の屈折率、さらに高温型石英が含まれていないことなどから、約9.5～13万年前に大山火山から噴出した大山松江軽石（DMP，町田・新井，1979，1992）に同定される。

調査区南壁西地割れ地点の試料17以下に降灰層準があると考えられる透明なバブル型ガラスで特徴づけられるテフラは、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約2.4～2.5万年前[*1]に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995）と考えられる。調査区南壁東地割れ地点の多くの試料から検出された透明なバブル型ガラスも、その特徴からATに由来すると考えられる。

また、調査区南壁西地点の試料21あるいは19付近に降灰層準があると考えられる淡褐色あるいは褐色の

バブル型ガラスで特徴づけられるテフラは、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）と考えられる。

さらに、調査区南壁西地割れ地点の試料17にわずかに含まれる屈折率がとくに低い火山ガラスについては、約9.5～11万年前に三瓶火山から噴出した三瓶木次テフラ（SK，松井・井上，1971，津久井・楮山，1981，豊蔵ほか，1991，町田・新井，1992，Machida，1999）に由来する可能性が考えられる。調査区南壁東地割れ地点の最下位の試料15からごくわずかに検出された淡褐色のバブル型ガラスについては、その層位や特徴などから、約8.4～8.9万年前に阿蘇火山から噴出した阿蘇４火山灰（Aso-4，町田ほか，1985，Machida，1999）に由来する可能性が指摘される。

ほかにも、たとえば調査区南壁西地割れ地点の試料７や５に含まれる繊維束状に発泡した透明な軽石型ガラスや、調査区南壁西地点の試料17に含まれる分厚い中間型ガラスなど、ほかのテフラに由来する可能性が高いテフラ粒子も認められることから、今後の調査分析によりさらに多くの示標テフラの降灰層準を把握することも可能と考えられる。

７．まとめ

吉谷銭神遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、大山松江軽石（DMP，約9.5～13万年前）、姶良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前*1）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前*1）などのほか、三瓶木次テフラ（Sk，9.5～11万年前）や阿蘇４火山灰（Aso-4，約8.4～8.9万年前）に由来する可能性のあるテフラ粒子を検出することができた。米子市域には、さらに多くのテフラが分布しており、遺跡調査の際に検出される可能性も高いことから、今後引き続いて調査分析を行うことによって、テフラ（火山灰）を利用したより詳細な編年研究が期待できる。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代．

文　献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入　戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

Machida,H.(1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan:recent progress. Quat. Res., 38, p.194-201.

町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347.

町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，

17, p.143-163.
町田洋・新井房夫（1979）大山倉吉軽石層－分布の広域性と第四紀編年上の意義．地学雑，88，p.313-330.
町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
町田洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）阿蘇４火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－．火　山，第２集，30，p.49-70.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79- 83.
松井整司・井上多津男（1971）三瓶火山の噴出物と層序．地球科学，25，p.147-163.
豊蔵勇・大村一夫・新井房夫・町田洋・高瀬信一・中平啓二・伊藤孝（1991）北陸海岸段丘における三瓶木　次テフラの同定とその意義．第四紀研究，30，p.79-90.
津久井雅志・横山雅則（1981）大山山麓における三瓶山起源の降下軽石層の発見とその意義．地質雑，87，p.559-562.

表１　火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md(sp)	md(fl)	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
調査区南壁	1	3	0	0	0	0	0	0	247	250
西	3	2	0	0	0	1	0	0	247	250
	5	1	0	0	0	0	1	0	248	250
	7	2	0	0	0	1	0	0	247	250
	9	2	0	0	0	0	0	0	248	250
	11	1	0	0	0	0	1	0	248	250
	13	4	1	0	0	0	0	0	245	250
	15	4	0	0	0	0	1	0	245	250
	17	6	1	0	1	1	0	0	241	250
	19	6	0	1	0	0	0	0	243	250
	21	6	1	0	0	0	0	0	243	250
	23	2	0	0	0	0	0	0	248	250
	25	2	0	0	0	0	0	0	248	250
	27	3	0	0	0	0	0	0	247	250
	29	5	0	0	0	1	1	0	243	250
	31	6	0	0	0	1	0	0	243	250
	33	9	0	0	0	0	0	0	241	250
	35	3	0	0	1	0	0	0	246	250
	37	5	0	0	1	1	0	0	243	250
調査区南壁	3	3	0	0	0	1	0	0	247	250
西地割れ	5	2	0	0	0	0	0	0	246	250
	7	2	0	0	0	0	0	2	247	250
	9	1	0	0	0	0	0	1	249	250
	11	0	0	0	0	0	0	0	250	250
	13	1	0	0	0	0	0	0	249	250
	15	2	0	0	1	0	0	0	247	250
	17	2	0	0	0	0	0	0	248	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

表2　調査区南壁東地割れ地点におけるテフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	色調	最大径
1	−	−	−	+	bw	透明
3	−	−	−	+	bw	透明
5	−	−	−	+	bw	透明
7	−	−	−	+	bw	透明
9	−	−	−	+	bw	透明
11	−	−	−	+	bw	透明
13	−	−	−	+	bw	透明
15	−	−	−	+	bw	透明＞淡褐

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，
−：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表3　屈折率測定結果

地　点	試料	火山ガラス	重鉱物	斜方輝石（γ）	角閃石（n_2）
調査区南壁西	19	1.499−1.513 (1.509−1.512)	(ho,cm)	−	−
調査区南壁西	33	1.499−1.501 (1.500)	(ho,cm)	−	−
調査区南壁 西地割れ	17	1.497−1.501 (1.499−1.501)	(ho,cm)	−	−
調査区南壁東	1	−	ho,cm,bi	−	ho:1.670−1.676 cm:1.659−1.663

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．屈折率の（ ）はmodeおよびmodal rangeを示す．ho：普通角閃石，cm：カミングトン閃石，bi：黒雲母．重鉱物の（ ）は量が少ないことを示す．

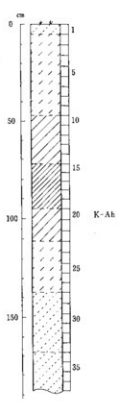


図1　調査区南壁西地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

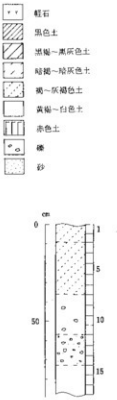


図2　調査区南壁西地割れ地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

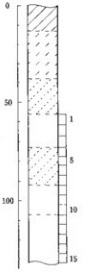


図3　調査区南壁東地割れ地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

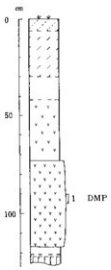


図4　調査区南壁東地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

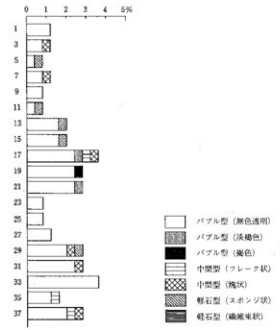


図5　調査区南壁西地点における火山ガラス比ダイヤグラム

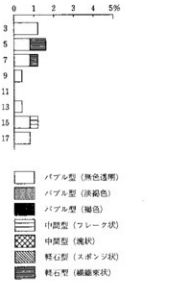


図6　調査区南壁西地割れ地点における火山ガラス比ダイヤグラム

第2節　吉谷銭神遺跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種　類	前処理・調整	測　定　法
No.1	土抗3埋土内	炭水化物	酸-アルカリ-酸洗浄,石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.2	竪穴住居2の溝内	炭水化物	酸-アルカリ-酸洗浄,石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦）	測定No. Beta−
No.1	2220±40	−26.4	2200±40	交点：cal BC 350,310,210 1σ：cal BC 365～190 2σ：cal BC 380～165	143226
No.2	2230±40	−26.4	2310±40	交点：cal BC 390 1σ：cal BC 400～375 2σ：cal BC 410～360,280～240	143227

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{13}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、較正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68％確率）・2σ（95％確率）は、較正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

第３節　吉谷銭神遺跡における花粉分析（０区西断面）

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解して残存していない場合もある。

２．試　料

分析試料は、０区西断面の暗褐色砂質土層、黒色砂質土層、暗茶色粘質土層、赤色粘土層から採取された計15点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。このうち、黒色砂質土層の堆積年代は弥生時代中期以前とされ、暗褐色砂質土層と黒色砂質土層の境目付近からは弥生時代～奈良時代の遺物が出土している。

３．方　法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え、15分間湯煎する。
２）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて、30分放置する。
４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。
５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。
７）検鏡・計数を行う。

各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結　果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉10、シダ植物胞子２形態の計25である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。花粉数が100個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

黒色砂質土層上部（S-4）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりもやや高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）、マツ属複維管束亜属（マツ類）が比較的多く、クリやクマシデ属－アサダが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科などがやや多く検出され、タンポポ亜科、キク亜科、アリノトウグサ属－フサモ属が伴われる。また、シダ植物胞子も多く検出された。

下位の暗茶色粘質土層（S-7～S-11）と赤色粘土層（S-12～S-15）からは、花粉がほとんど検出されなかった。黒色砂質土層下部（S-5、S-6）および暗褐色砂質土層（S-1～S-3）では、コナラ属コナラ亜属やヨモギ属などが検出されたが、いずれも微量である。

5．花粉分析から推定される植生と環境

黒色砂質土層上部の堆積当時は、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、キク亜科、シダ植物などが生育する陽当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類などの照葉樹林、ナラ類（コナラやクヌギ）やクリなどの二次林的な落葉樹林、およびマツ類（クロマツ）などが分布していたと推定される。

暗褐色砂質土層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、ヨモギ属などが生育する比較的乾燥した環境であったと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文　献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表1　吉谷銭神遺跡における花粉分析結果

分類群		0区西断面														
学名	和名	S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	S-6	S-7	S-8	S-9	S-10	S-11	S-12	S-13	S-14	S-15
Arboreal pollen	樹木花粉															
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属				16											
Cryptomeria japonica	スギ				2											
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科				1											
Alnus	ハンノキ属				1											
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ				1											
Castanea crenata	クリ		1		9											
Castanopsis	シイ属				1	1										
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	3	1	15	1	2									
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属				27	5	2									1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ				1											
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ				1	1	1									
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉															
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				1											
Araliaceae	ウコギ科				1											
Nonarboreal pollen	草本花粉															
Gramineae	イネ科		1		9		1								1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科		2	1	13	3										
Ranunculus	キンポウゲ属				1											
Cruciferae	アブラナ科						1									
Impatiens	ツリフネソウ属				1											
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属				2											
Apiodeae	セリ亜科				1	1										
Lactucoideae	タンポポ亜科				7											
Asteroideae	キク亜科				2			1								
Artemisia	ヨモギ属	2	4	1	20	3		1								
Fern spore	シダ植物胞子															
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1	1	21	5	2									
Trilate type spore	三条溝胞子				12	1										
Arboreal pollen	樹木花粉	1	4	1	76	8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonaboreal pollen	草本花粉	2	7	2	56	7	2	2	0	0	0	0	0	0	1	0
Total pollen	花粉総数	3	11	3	134	15	7	2	0	0	0	0	0	0	1	1
Unknown pollen	未同定花粉	1	6	0	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	1	1	1	33	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)

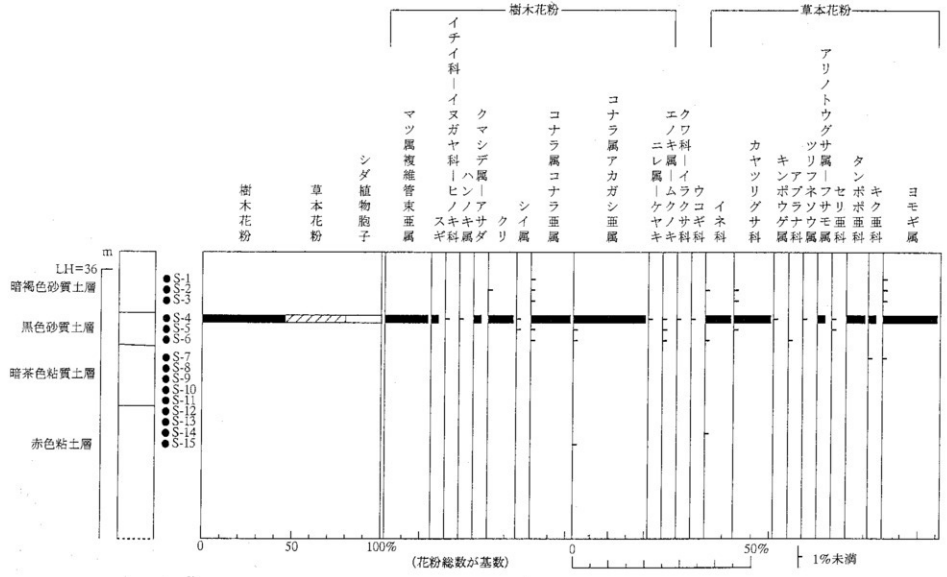


図1　吉谷銭神遺跡、0区西断面における花粉ダイアグラム

第4節　米子市、吉谷銭神遺跡における花粉分析（不明遺構2）

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解して残存していない場合もある。

2．試　料

試料は、古墳時代前期とされる池状遺構（不明遺構2）から採取された試料1（1層、暗茶色砂質土）、試料2（2層、淡黒茶色砂質土）、試料3（3層、暗茶色砂質土）、試料4（4層、淡黒茶色砂質土）、試料5（5層、淡黄茶色砂質土）の5点である。このうち、2層からは奈良時代の須恵器、5層からは古墳時代前期前葉の遺物が出土している。

3．方　法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え、15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて、30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製する。
7）検鏡・計数を行う。

各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

4．結　果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉7、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計16である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハシバミ属、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、アリノトウグサ属－フサモ属、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

池状遺構（SX01）の1層（試料1）では、マツ属複維管束亜属、スギ、ハシバミ属、クリ、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、シダ植物胞子などが検出されたが、いずれも少量である。その他の試料では、花粉がほとんど検出されなかった。

5．花粉分析から推定される植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、1層（暗茶色砂質土）の堆積当時は、ヨモギ属、タンポポ亜科、キク亜科、シダ植物などが生育する湯当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類などの照葉樹林、ナラ類（コナラやクヌギ）やクリなどの二次林的な落葉樹林、およびマツ類（クロマツ）やスギなどの針葉樹林が分布していたと推定される。

2層～5層では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。このことから、池状遺構（不明遺構2）は常時滞水するような状況ではなかった可能性が考えられる。

文　献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表1　吉谷遺跡における花粉分析結果

分類群		SX01				
学名	和名	1	2	3	4	5
Arboreal pollen	樹木花粉					
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	7		8		
Cryptomeria japonica	スギ	2				
Corylus	ハシバミ属	1				
Castanea crenata	クリ	1				
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	3		1		
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	2				
Oleaceae	モクセイ科	1				
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1		
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科		1	1		
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属			1		
Apiodeae	セリ亜科	1				
Lactucoideae	タンポポ亜科	1				
Asteroideae	キク亜科	2				
Artemisia	ヨモギ属	4	2			
Fem spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	6	4	3	1	
Trilate type spore	三条溝胞子	19	2	2		
Arboreal pollen	樹木花粉	17	0	9	0	0
Arboreal·Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	0	0	1	0	0
Nonarboreal pollen	草木花粉	8	3	2	0	0
Total pollen	花粉総数	25	3	12	0	0
Unknown pollen	未同定花粉	3	0	0	0	0
Fem spore	シダ植物胞子	25	6	5	1	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

吉谷銭神遺跡出土土器一覧表

遺物番号	掲載番号	出土地点	出土層位	法量(cm)	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
po1	5	SX05	黒色土直下			粗	軟質	暗褐色	
po2	7	SI01		口径(28.6)	縄文土器。口縁端部に1条の突帯を貼り付ける。突帯には刺突が巡る。	やや粗	やや軟質	褐色	
po3	7	SI01		口径(27.7)	弥生土器、鉢。口縁部ナデ、内外面ケズリ。	密	良好	褐色	
po4	7	SI01			土師器、甕。内外面ヨコナデ。	密	良好	褐色	
po5	7	SI01		口径(15.8)	土師器、甕。口縁面ヨコナデ。	密	良好	灰色	
po6	7	SI01		口径(17.2)	弥生土器、甕。風化著しい。口縁に4条の凹線が巡る。	やや粗	やや軟質	淡褐色	
po7	8			口径(22.0)	弥生土器、甕。内傾ぎみに立ち上がる口縁に4条の凹線が巡る。	密	良好	淡褐色	
po8	8			口径(21.0)	弥生土器、甕。大きく拡張する口縁に5条の凹線が巡る。	密	良好		
po9	8			口径(21.5)	弥生土器、甕。垂直に立ち上がる口縁に4条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po10	8			口径(12.0)	弥生土器、甕。やや肥厚する口縁に3条の凹線が巡る。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po11	8			口径(26.0)	弥生土器、高坏。大きく外反する口縁に5条の凹線が巡る。内外面ヨコナデ。	密	良好	橙褐色	
po12				口径(18.4)	弥生土器、甕。大きく拡張する口縁に8条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po13	8			口径(16.5)	弥生土器、甕。垂直に立ち上がる口縁に2条の凹線が巡る。	密	良好	褐色	
po14	8			口径(16.0)	弥生土器、甕。「T」字状に肥厚する口縁端部に3条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po15	8			口径(12.4)	弥生土器、甕。「T」字状に肥厚する口縁端部に4条の凹線が巡る。	密	やや軟質	淡褐色	
po16	8			口径(14.8)	弥生土器、甕。「T」字状に肥厚する口縁端部に4条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	茶褐色	
po17	8			口径(16.0)	弥生土器、甕。垂直に立ち上がる口縁部に4条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po18	9			口径(19.0)	弥生土器、壺。外面風化、内面ハケ。	密	やや軟質	淡褐色	
po19	9			胴部径(17.2)	弥生土器、高坏。外面風化、内面ミガキ。	密	良好	淡茶褐色	
po20	9			底部径	弥生土器、低部。内面ケズリ、外面ミガキ。	密	良好	橙褐色	
po21	9				弥生土器、甕。口縁部に2条の凹線が巡る。	密	良好	褐色	
po22	9				弥生土器、甕。垂直に立ち上がる口縁部に4条の凹線が巡る。	密	良好	茶褐色	
po23	9				土師器、甕。口縁部は無文で垂直に立ち上がる。内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po24	9				弥生土器、高坏。	密	良好	褐色	
po25	9			底部径	弥生土器、底部。内面風化、外面ミガキ。	密	良好	褐色	
po26	9			底部径	弥生土器、底部。内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po27	10	SK05	埋土中		弥生土器、壺。口縁は大きく外反し、突帯を貼り付ける。	密	良好	褐色	
po28	10	SK05	埋土中		弥生土器、壺。内外面とも風化。	やや粗	やや軟質	淡赤褐色	
po29	10	SK05	埋土中		弥生土器、壺。内面風化、外面ハケ。	密	良好	黒褐色	
po30	10	SK05	埋土中	口径(15.8)	弥生土器、甕。口縁部は水平気味に伸び、端部はやや肥厚する。内面風化、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po31	10	SK05	埋土中	口径(16.6)	弥生土器、甕。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po32	10	SK05	埋土中	口径(15.6)	弥生土器、甕。口縁端部は上方にやや肥厚する。内外面ともハケ。	密	良好	褐色	
po33	10	SK05	埋土中	口径(15.8)	弥生土器、甕。口縁部は水平気味に伸びる。端部欠損。内面風化、外面ハケ。	密	良好	淡褐色	
po34	10	SK05	埋土中	口径(24.2)	弥生土器、甕。口縁は「く」字に伸びる。端部には多の凹線が、頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po35	11	SK05	埋土中	底径(4.8)	弥生土器、甕。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po36	11	SK05	埋土中	底径(9.6)	弥生土器、底部。内外面とも風化。	密	やや軟質	褐色	
po37	11	SK05	埋土中	底径(5.0)	弥生土器、底部。外面ナデ。	密	良好	黒褐色	
po38	11	SK05	埋土中	底径(5.0)	弥生土器、底部。底部中央はくぼむ。内外面とも風化。	密	良好	橙褐色	
po39	12	P1	埋土中	口径(6.3)	弥生土器、甕。頸部に指頭圧痕貼付突帯が巡る。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po40	12	P1	埋土中	口径(17.6)	弥生土器、甕。口縁端部に2条の凹線が巡る。内面風化、外面ハケ。	密	やや軟質	橙褐色	
po41	12	P1	埋土中		弥生土器、壺。口縁は外反する。肩部直上に2条の貼付突帯が巡る。内外面とも風化。	密	やや軟質	橙褐色	

遺物番号	掲載番号	出土地点	出土層位	法量(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
po42	12	P1	堀土中	底径(4.0)	弥生土器、底部。内外面とも風化。	密	軟質	橙褐色	
po43	12	SD01		底径(5.8)	弥生土器、底部。内面ナデ、外面ミガキ。	密	良好	暗褐色	
po44	13	SI05		口径(22.4)	弥生土器、甕。口縁端部に3条の凹線が巡る。肩部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。内面ケズリ、外面風化。	密	良好	淡褐色	
po45	13	SI05		口径(13.0)	弥生土器、甕。内外面ともナデ。	密	軟質	淡茶褐色	
po46	13	SI05		底径(5.4)	弥生土器、底部。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po47	14	土器溜	黒色土中	口径(26.0)	弥生上器、壺。口縁は大きく外反する。端部は刻み目を入れてから3条の凹線が巡る。口縁直下に1条、肩部に3条の貼付突帯が巡る。内外面ともハケ。	密	良好	褐色	
po48	14	土器溜	黒色土中	底径(5.0)	弥生土器、底部。内外面ともナデ。	密	良好	褐色	
po49	14	土器溜	黒色土中	口径(17.5)	弥生土器、甕。口縁はやや水平に伸び、端部は少し肥厚する。内外面ともハケ。	密	良好	褐色	
po50	14	土器溜	黒色土中	口径(23.4)	弥生土器、甕。口縁端部は刻み目を入れてから2条の凹線が巡る。頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。内外面ともハケ。	密	良好	褐色	
po51	16	SX01	埋土中	口径(24.0)	土師器、壺。複合口縁。内外面とも風化。	密	やや軟質	淡褐色	
po52	16	SX01	埋土中	口径(24.4)	土師器、壺。複合口縁。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po53	16	SX01	埋土中	口径(18.8)	土師器、甕。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po54	16	SX01	埋土中	口径(15.0)	土師器、甕。内外面ともナデ。	密	良好	淡灰褐色	
po55	16	SX01	埋土中	口径(12.0)	土師器、甕。内外面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	淡褐色	
po56	16	SX01	埋土中	口径(9.8)	土師器、短頸壺。内外面ともナデ。	密	良好	淡黄褐色	
po57	16	SX01	堀土中		土師器、小型壺。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po58	16	SX01	堀土中	口径(13.4)	土師器、鉢。内外面ともナデ。	密	良好	淡灰色	
po59	16	SX01	堀土中	口径(13.4)	土師器、高坏。内外面とも風化。	密	良好	淡茶褐色	
po60	16	SX01	埋土中		土師器、高坏。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po61	16	SX01	埋土中		土師器、高坏。内外面とも風化。	密	良好	灰褐色	
po62	16	SX01	埋土中	底径(4.5)	土師器、低脚坏?。内外面ともナデ。	密	良好	淡褐色	
po63	16	SX01	堀土中		土師器、小型壺?。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po64	16	SX01	堀土中		土師器、低脚坏?。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po65	16	SX01	堀土中	底径(9.8)	土師器、甑。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po66	16	SX01	埋土中	底径(8.0)	弥生土器、底部。内外面とも風化。	密	良好	橙褐色	
po67	16	SX01	堀土中	底径(4.7)	弥生土器、底部。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好		
po68	18	SX03	黒色土	底径(10.6)	須恵器、坏身。底部に糸切痕、ナデ。	密	堅緻	灰褐色	
po69	18	SX03	黒色土	口径(17.4) 器高4.0 低値(11.0)	須恵器、坏身。坏内面静止ナデ、底部糸切、高台に沿って爪の圧痕が巡る。	密	堅緻	暗褐色	
po70	18	SX03	黒色土		土師器、高坏。内面輪積み痕を残す、外面面取り。	密	良好	橙褐色	
po71	18	SX03	黒色土	底径(15.8)	弥生土器、底部。内外面とも風化。	密	軟質	淡褐色	
po72	18	SX03	黒色土		土師器、甕。内面ナデ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po73	21	テラス1	黒色土	口径(16.4)	土師器、坏身。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po74	21	テラス1	黒色土	口径(18.5)	土師器、坏身。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po75	21	テラス1	黒色土	口径(15.9)	土師器、内外面ともナデ、底部付近ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po76	21	テラス1	黒色土	口径(17.0) 器高2.1	土師器、皿。内外面とも風化。	密	良好	橙褐色	
po77	21	テラス1	黒色土	口径(14.6) 器高3.4	土師器、皿。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po78	21	テラス1	黒色土	口径(12.4) 器高1.7	土師器、皿。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po79	21	テラス1	黒色土	底径(11.0)	土師器、坏身。内外面ともナデ。高台貼付。	密	良好	褐色	
po80	21	テラス1	黒色土	底径(8.8)	土師器、坏身。内外面ともナデ。高台貼付。	密	良好	橙褐色	
po81	21	テラス1	黒色土	底径(8.2)	土師器、坏身。内外面ともナデ。高台貼付。	密	良好	橙褐色	
po82	21	テラス1	黒色土	口径(22.6)	土師器、甕。内外ナデ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po83	21	テラス1	黒色土	口径(19.0)	土師器、甕。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	

遺物番号	挿図番号	出土地点	出土層位	法量(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
po84	21	テラス1	黒色土	口径(27.5)	土師器、甕。内面ケズリ、外面ハケ、口縁部ナデ。	密	良好	暗褐色	
po85	21	テラス1	黒色土	口径(27.1)	土師器、甕。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po86	21	テラス1	黒色土	長さ(4.0) 直径(1.0)	土錘。残存重量は2.9g。				
po87	21	テラス1	黒色土	長さ(3.3) 直径(0.9)	土錘。残存重量は1.4g。				
po88	21	テラス1	黒色土	長さ(3.3) 直径(0.8)	土錘。残存重量は1.1g。				
po89	22	テラス1		口径(12.8) 器高4.4	須恵器、坏身。口縁端部は内側に肥厚する。内外面ともナデ、底部糸切。	密	堅緻	灰色	
po90	22	テラス1		底径(9.0)	須恵器、坏身。内外面とも風化。	密	やや軟質	淡灰色	
po91	22	テラス1	黒色土	底径(10.9)	須恵器、短頸壺。内面タタキ後ナデ、外面ナデ、底部中央に墨書あり。	密	堅緻	灰色	
po92	22	テラス1			須恵器、坏蓋。内面静止ナデ、外面ナデ。	密	堅緻	灰色	
po93	22	テラス1	黒色土	口径(17.7)	須恵器、坏蓋。口縁部はやや肥厚する。内外面ともナデ。	密	堅緻	淡灰色	
po94	22	テラス1		口径(19.2) 器高3.2 底径(13.2)	須恵器、皿。内外面ともナデ。高台貼付。	密	堅緻	灰色	
po95	22	テラス1		口径(12.6) 器高2.5	須恵器、皿。内面静止ナデ、外面ナデ。底部糸切。	密	堅緻	灰色	
po96	22	テラス1	黒色土	口径(15.4) 器高3.1 脚径(30.5)	須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ、口縁部ナデ。	密	堅緻	灰褐色	
po97	22	テラス1		口径(18.8)	須恵器、甕。口縁部ナデ。	密	堅緻	暗灰色	
po98	22	テラス1	表土	口径(16.5)	須恵器、甕。口縁部ナデ。	密	堅緻	灰褐色	
po99	22	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、口縁部ナデ。一部に自然釉あり。	密	堅緻	灰色	
po100	23	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ、口縁部ナデ。	密	堅緻	灰色	
po101	23	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ、口縁部ナデ。	密	堅緻	灰色	
po102	23	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ、頸部貼付。	密	堅緻	灰褐色	
po103	23	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面放射線状の当て具痕、外面タタキ。	密	堅緻	暗褐色	
po104	23	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面放射線状の当て具痕、外面タタキ、底部に焼台として使用した須恵器片溶着。	密	堅緻	暗褐色	
po105	24	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ、口縁部ナデ。	密	堅緻	灰色	
po106	25	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ。	密	堅緻	灰色	
po107	25	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ。	密	堅緻	灰色	
po108	25	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ。	密	堅緻	淡青灰色	
po109	25	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ。	密	堅緻	暗灰色	
po110	25	テラス1	黒色土		須恵器、甕。内面当て具痕、外面タタキ。	密	堅緻	灰色	
po111	26	SI03		口径(22.8)	土師器、坏身。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po112	26	SI03		口径(13.6)	土師器、坏身。内外面ともナデ。	密	良好	褐色	
po113	26	SI03			土師器、坏身。内外面ともナデ、高台貼付。	密	良好	橙褐色	
po114	26	SI03			土師器、坏身。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po115	27	SA		底径(7.0)	土師器、坏身。内外面ともナデ。	密	良好	淡褐色	
po116	28	SA	ピット5	口径(13.4) 器高4.2 底径(6.5)	須恵器、坏身。内外面とも風化。	密	やや軟質	灰色	
po117	31	0−2区	表土	底径(10.6)	縄文土器。口縁端部直下に1条の突帯を貼り付ける。突帯には刺突が巡る。	密	良好	灰褐色	
po118	31	0区	黒色土		縄文土器。口縁端部直下に1条の突帯を貼り付ける。突帯には刺突が巡る。	密	良好	褐色	
po119	31	0−2区	黒色土		縄文土器。胴部に1条の突帯を貼り付ける。内面ケズリ、外面風化。	やや粗	やや軟質	淡灰褐色	
po120	31	0−2区	黒色土		縄文土器。胴部に4条の突帯を貼り付ける。突帯には刺突が巡る。内面ナデ、外面ナズリ。	密	良好	淡褐色	
po121	31	0−2区		口径(33.2)	縄文土器。口縁端部直下に1条の突帯を貼り付ける。内外面ともナデ。	密	良好	淡褐色	
po122	31	0−2区		口径(26.2)	縄文土器。口縁端部直下に1条の突帯が巡る。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po123	31	2区	表土	口径(20.1)	弥生土器。甕。口縁部はやや肥厚する。内面ハケ、外面風化。	密	良好	橙褐色	
po124	31	2区		口径(15.6)	弥生土器。甕。口縁部は上方にやや肥厚する。内外面ともハケ。	密	良好	褐色	
po125	31	1区	表土	口径(20.2)	弥生土器。甕。口縁部無紋、頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。	密	やや軟質	赤褐色	

遺物番号	掲載番号	出土地点	出土層位	法量(cm)	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
po126	31	1区	表土	口径(18.3)	弥生土器、甕。口縁端部上方に拡張する。器形には指頭圧痕貼付突帯が巡る。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po127	31	3区	表土	口径(21.1)	弥生土器、甕。口縁端部はやや肥厚する。器形には指頭圧痕貼付突帯が巡る。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po128	31	2区	黒色土		弥生土器、甕。口縁端部欠損。頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po129	31	2区	黒色土		弥生土器、壺。頸、肩部に突帯が巡り、波状紋と櫛描紋が施される。内面ハケ。	密	良好	淡褐色	
po130	32	0区	黒色土		弥生土器、水差し形土器の取手部かと。全体に風化。	密	良好	橙褐色	
po131	32	0−2区	黒色土	口径(18.0)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し、2条の凹線が巡る。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po132	32	0−2区	黒色土	口径(17.6)	弥生土器、甕。口縁端部に3条の凹線が巡る。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	灰褐色	
po133	32	0−2区	表土	口径(16.6)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張、3条の凹線が巡る。内面ナデ。	密	良好	褐色	
po134	32	0−2区	黒色土	口径(12.5)	弥生土器、甕。口縁端部は「字状に拡張し、3条の凹線が巡る。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	
po135	32	0区		口径(28.4)	弥生土器、甕。口縁端部に3条の凹線が巡る。内面ナデ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po136	32	0−2区	黒色土	口径(17.8)	弥生土器、甕。口縁端部に2条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po137	32	0−2区	黒色土	口径(18.8)	弥生土器、甕。口縁端部に2条の凹線が巡る。	密	良好	淡灰褐色	
po138	32	4区	黒色土	口径(18.8)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し2条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po139	32	0−2区	黒色土	口径(15.9)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し3条の凹線が巡る。	密	良好	淡褐色	
po140	32	0−2区	黒色土		弥生土器、器種不明。口縁端部に3条の凹線が巡る。	密	良好	褐色	
po141	32	0−2区	黒色土	口径(13.6)	弥生土器、甕。口縁端部はやや肥厚し2条の凹線が巡る。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	
po142	32	3区	黒色土	口径(11.8)	弥生土器、甕。口縁部は外方に拡張する。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	
po143	32	0−2区	黒色土		弥生土器、器種不明。口縁端部に3条の凹線が巡る。	密	良好	淡褐色	
po144	32	0区	黒色土	口径(17.2)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し5条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po145	32	0−2区	黒色土	口径(17.0)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張、櫛目線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po146	32	0−2区		口径(19.6)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し4条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po147	32	6区		口径(16.4)	弥生土器、甕。口縁端部は「T」字状に拡張し、3条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po148	32	0−2区	黒色土	口径(13.2)	弥生土器、甕。口縁端部は「T」字状に拡張し、5条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po149	32	0−2区	黒色土	口径(17.0)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し、4条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po150	32	0−2区	黒色土	口径(16.8)	弥生土器、甕。口縁端部は上方に拡張し、4条の凹線と肩部外面に刺突紋が巡る。内面ケズリ。	密	良好	淡褐色	
po151	32	0−2区	黒色土	口径(11.6)	弥生土器、甕。口縁端部は無紋でやや「T」字状に拡張する。胴部には刺突紋が巡る。内面ケズリ、外面ミガキ。	密	良好	褐色	
po152	32	0−2区			弥生土器、甕。胴部に刺突紋が巡る。内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po153	33	0−2区	黒色土	口径(8.2) 器高 14.0	弥生土器、甕。口縁部は粗い作り。内面ケズリ、外面ミガキ。	密	良好	淡黒褐色	
po154	33	0−2区	黒色土		弥生土器、器種不明。頸部に刺突紋が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po155	33	0−2区	黒色土	口径(19.2)	弥生土器、器種不明。口縁端部は上方に拡張し8条の凹線が巡る。	密	良好	橙褐色	
po156	33	0区	黒色土	口径(13.0)	弥生土器、器種不明。口縁部は上方へ拡張し、擬凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	暗褐色	
po157	33	0−2区		底径(8.4)	弥生土器、高坏。脚端部は無紋。内面ケズリ。	密	良好	淡褐色	
po158	33	0−2区	黒色土	底径(19.6)	弥生土器、高坏。脚端部に2条の凹線が巡る。内面ハケ。	密	良好	橙褐色	
po159	33	0区	黒色土	底径(17.4)	弥生土器、高坏。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po160	33	0区	黒色土	底径(18.4)	弥生土器、高坏。	密	良好	褐色	
po161	33	0−2区	黒色土	底径(11.8)	弥生土器、高坏。脚端部に4条の凹線が巡る。内面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po162	33	0−2区	黒色土	底径(10.8)	弥生土器、高坏。内面ケズリ。	密	良好	淡褐色	
po163	33	0区	黒色土		弥生土器、高坏。内面整形痕あり。	密	良好	淡褐色	
po164	33	1区	黒色土		弥生土器、高坏。内外面とも風化。	密	良好	淡褐色	
po165	33	4区	表土		弥生土器、高坏。内面ケズリ。	密	良好	淡褐色	
po166	33	5区		底径(9.2)	土器底部。内面ナデ。	密	やや軟質	淡茶褐色	
po167	33	0−2区	黒色土	底径(11.2)	土器底部。内面ナデ。	密	良好	褐色	

遺物番号	挿図番号	出土地点	出土層位	法量(cm)	特徴	胎土	焼成	色調	備考
po168	33	1区	黒色土	底径(6.0)	土器底部。内面ナデ。	密	良好	淡褐色	
po169	33	0−2区	黒色土	底径(6.2)	土器底部。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po170	33	0−2区	黒色土	底径(4.6)	土器底部。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po171	33	0−2区	黒色土	底径(5.2)	土器底部。内面ケズリ、外面ミガキ。	密	良好	橙褐色	
po172	33	0−2区		底径(4.9)	土器底部。内面ケズリ。	密	良好	暗褐色	
po173	33	0−2区	黒色土	底径(8.4)	土器底部。底部は窪む。内面ナデ。	密	良好	茶褐色	
po174	33	0−2区	黒色土	底径(7.4)	土器底部。底部は窪む。内外面とも風化。	密	良好	褐色	
po175	33	1区		口径(20.4)	土師器、甕。複合口縁。	密	良好		
po176	33	0−2区	黒色土	口径(20.0)	土師器、壺。複合口縁。	密	良好	褐色	
po177	33	1区	黒色土	口径(12.0)	土師器、甕。	密	良好	淡褐色	
po178	33	4区		口径(15.6)	土師器、甕。	密	良好	褐色	
po179	33	0−2区	黒色土	口径(16.8)	土師器、甕。	密	良好	褐色	
po180	33	0区	黒色土	口径(13.9)	土師器、甕。	密	良好	暗褐色	
po181	33	6区			土師器、器種不明。竹管状のスタンプ紋を施す。	密	良好	褐色	
po182	34	0区	黒色土	口径(13.0) 器高(3.9) 底径(9.8)	土師器、坏。高台貼付。内外面ともナデ。	密	良好	淡褐色	
po183	34	6区	表土	口径(13.2)	土師器、坏。内外面ともナデ。	密	良好	茶褐色	
po184	34	6区	表土	底径(9.0)	土師器、坏。貼付高台。内外面ともナデ。	密	良好	茶褐色	
po185	34	0区	黒色土	底径(10.2)	土師器、坏。貼付高台。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po186	34	4区		底径(6.3)	土師器、坏。貼付高台。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po187	34	0区	黒色土	口径(21.4)	土師器、坏蓋。	密	良好	赤褐色	
po188	34	4区		口径(18.2)	土師器、鉢。内面ナデ、外面ケズリ。	密	良好	橙褐色	
po189	34	0区	黒色土	口径(21.6)	土師器、鉢。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po190	34	0区	黒色土	口径(25.8)	土師器、鉢。	密	良好	橙褐色	
po191	34	4区	黒色土	口径(13.7)	土師器。皿。内外面とも風化。	密	良好	茶褐色	
po192	34			口径(13.0)	土師器。皿。内外面とも風化。	密	良好	赤褐色	
po193	34	5区		口径(12.4) 器高 2.4	土師器。皿。内外面ともナデ。	密	良好	褐色	
po194	34	6区		口径(15.2)	土師器。皿。内外面ともナデ。	密	良好	茶褐色	
po195	34	0区	黒色土	口径(19.8)	土師器。皿。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po196	34	0区	黒色土	口径(17.8) 器高 2.0	土師器。皿。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po197	34	0区	黒色土	口径(17.8) 器高 1.8	土師器。皿。内外面とも風化。	密	良好	橙褐色	
po198	34	0区	黒色土	口径(17.4) 器高 1.8	土師器。皿。内外面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po199	34	0区	黒色土	口径(16.4)	土師器。甕。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	赤褐色	
po200	34	6区		口径(29.2)	土師器。甕。内外面とも風化。	密	良好	橙褐色	
po201	34	6区		口径(29.6)	土師器。甕。内面ケズリ。	密	良好	赤褐色	
po202	35	0区	黒色土	口径(22.0)	土師器。甕。内面ケズリ、外面風化。	密	良好	褐色	
po203	35	6区		口径(18.2)	土師器。甕。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	
po204	35			口径(23.4)	土師器。甕。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po205	35	0区	黒色土	口径(18.0)	土師器。甕。内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po206	35	6区		口径(32.6)	土師器。甕。口縁部ハケ、内面ケズリ。	密	良好	褐色	
po207	35	4区	表土	口径(18.7)	土師器。甕。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po208	35	4区		口径(19.6)	土師器。甕。内面ケズリ、外面風化。	密	良好	褐色	
po209	35	2区	黒色土	口径(23.7)	土師器。甕。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	

遺物番号	掘図番号	出土地点	出土層位	法量(cm)	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
po210	35	1区	黒色土	口径(18.3)	土師器、甕。内面ケズリ、外面風化。	密	良好	橙褐色	
po211	35		黒色土	口径(24.4)	土師器、甕。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	淡褐色	
po212	35	0区	黒色土	口径(25.4)	土師器、甕。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	
po213	35			口径(28.8)	土師器、甕。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	褐色	
po214	36	2区		口径(24.4)	土師器、甕。内面ケズリ、外面ナデ。	密	良好	褐色	
po215	36	0区	黒色土	口径(26.5)	土師器、甕。内面ケズリ、外面風化。	密	良好	褐色	
po216	36	1区	黒色土	口径(27.7)	土師器、甕。内外面とも風化。	密	良好	橙褐色	
po217	36	2区	黒色土	口径(33.6)	土師器、甕。内面ともナデ。	密	良好	橙褐色	
po218	37	6区	表土		土師器、甑。取手部。内面ケズリ、外面ハケ。	密	良好	橙褐色	
po219	37	4区			土製支脚。	密	良好	橙褐色	
po220	37	4区			土製支脚。	密	良好	橙褐色	
po221	37	4区	黒色土	底径(14.4)	土師器、甑底部。内面ケズリ、外面風化。	密	良好	褐色	
po222	37	4区	黒色土	底径(16.4)	土師器、甑底部。内面ケズリ、外面風化。穿孔あり。	密	良好	橙褐色	
po223	37	4区	表土	底径(18.5)	土師器、甑底部。内面ケズリ、外面ナデ。穿孔あり。	密	良好	橙褐色	
po224	37	4区			土師器、甕。	密	良好	褐色	
po225	37	0−2区			土師器、甕。	密	良好	褐色	
po226	37	4区			土師器、甕。底部片。	密	良好	褐色	
po227	38	4区	黒色土	口径(11.4) 器高4.1 底径(6.8)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部はやや内側に屈曲する。	緻密	堅緻	青灰色	
po228	38	4区		口径(12.1) 器高4.2 底径(7.9)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部はやや内側に屈曲する。	緻密	堅緻	暗灰色	
po229	38	4区	表土		須恵器、坏。底部ヘラ切、口縁端部はやや内側に屈曲する。	緻密	堅緻	褐色	
po230	38	4区		口径(12.4)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部は内側に屈曲する。	緻密	堅緻	灰色	
po231	38	4区		口径(13.4) 器高4.1 底径(6.4)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部は内側に屈曲する。	緻密	堅緻	灰色	
po232	38	4区	表土	口径(12.6) 器高3.5 底径(9.0)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部は内側に屈曲する。	緻密	堅緻		
po233	38	5区		口径(13.6) 器高4.1 底径(9.6)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部は外方に伸びる。	緻密	堅緻	灰色	
po234	38	4区	黒色土	口径(13.6) 器高3.7 底径(7.4)	須恵器、坏。底部糸切、口縁端部は上方に伸びる。	緻密	堅緻	灰褐色	
po235	38	2区	黒色土	口径(13.2) 器高3.1 底径(9.6)	須恵器、坏。口縁端部は外方へ直線的に伸びる。	緻密	堅緻	赤褐色	
po236	38	4区	黒色土		須恵器、壺。	緻密	堅緻	灰色	
po237	38	2区	黒色土	口径(17.8)	須恵器、坏蓋。口縁端部はやや肥厚する。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰色	
po238	38	4区	黒色土	口径(17.4)	須恵器、坏蓋。口縁端部はやや肥厚する。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰色	
po239	38	4区		口径(9.8)	須恵器、壺。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰褐色	
po240	38	0−2区	黒色土	口径(9.8)	須恵器、壺。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰色	
po241	38	0−2区		口径(15.6)	須恵器、鉢。口縁端部は内側に屈曲する。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰色	
po242	38	4区	黒色土	口径(16.3)	須恵器、鉢。口縁端部は内側に屈曲する。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰褐色	
po243	38	6区		口径(14.8)	須恵器、鉢。口縁端部は内側に屈曲する。内外面ともナデ。	緻密	堅緻	灰色	
po244	38	1区		口径(18.0)	須恵器、壺。	緻密	堅緻	茶褐色	
po245	38	5区	表土	口径(15.2)	須恵器、壺。	緻密	堅緻	灰色	
po246	38	6区	黒色土	口径(14.2)	須恵器、壺。	緻密	堅緻	灰色	

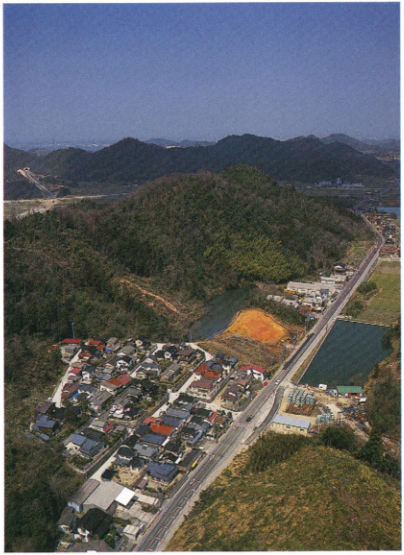
吉谷銭神遺跡出土石器一覧表

遺物番号	出土地点	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
S 1	不明遺構 1	黒色土直下	石鏃	黒曜石	2.4	1.5	0.7	1.7	
S 2	不明遺構 1	黒色土直下	石鏃	黒曜石	2.1	(1.6)	0.5	0.9	
S 3	不明遺構 1	黒色土直下	楔形石器		2.4	1.0	0.7	2.7	
S 4	不明遺構 1	黒色土直下	磨石		(8.5)	6.7	5.1	323.8	
S 5	不明遺構 1	黒色土直下	石皿		(32.0)	30.7	5.2		
S 6	竪穴住居跡 1	床面	砥石		13.3	13.6	8.5	1713.1	
S 7	竪穴住居跡 1	床面	砥石		(11.3)	5.7	5.2	337.5	
S 8	竪穴住居跡 1	埋土	石鏃		12.3	7.4	1.8	188.3	
S 9	土坑 1	埋土	石鏃		2.2	1.4	0.3	0.6	
S10	土坑 1	埋土	石鏃	黒曜石	2.1	(1.6)	0.3	0.7	
S11	土坑 1	埋土	石鏃	黒曜石	2.3	(1.9)	0.3	0.9	
S12	土坑 1	埋土	石鏃		4.2	2.3	0.2	1.9	
S13	土坑 1	埋土	不明		(2.2)	(1.1)	0.2	0.6	加工痕あり
S14	土坑 1	埋土	石核	黒曜石	2.9	1.9	0.9	4.6	
S15	土坑 1	埋土	管玉		0.85	0.2 (直径)		0.1	
S16	土坑 1	埋土	管玉		0.8	0.22(直径)		0.1	
S17	土坑 1	埋土	管玉		(0.6)	0.2 (直径)		0.05	
S18	溝状遺構 2	石器集積	磨製石斧		8.9	3.8	2.1	117.5	
S19	溝状遺構 2	石器集積	砥石		12.0	7.6	2.1	281.0	
S20	溝状遺構 2	石器集積	砥石		(9.2)	5.9	5.0	387.7	
S21	溝状遺構 2		剥片	黒曜石	4.35	1.1	1.2	4.9	
S22	土器溜り 1	黒色土中	石鏃	黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.3	
S23	不明遺構 2	埋土	叩き石		12.5	7.4	5.3	572.3	
S24	不明遺構 2	埋土	砥石		(11.2)	6.4	4.9	586.4	
S25	テラス 1	埋土	磨製石斧		(6.8)	6.9	3.9	206.0	
S26	テラス 1	埋土	砥石		(12.9)	11.1	7.8	1261.5	
S27	4 区	黒色土	尖頭器		(3.0)	1.7	0.6	1.6	
S28	3 区	黒色土	スクレイパー	黒曜石	2.8	1.8	0.8	4.4	
S29	4 区	黒色土	楔形石器	黒曜石	2.6	1.8	0.6	2.7	
S30	0－2 区	黒色土	不明	黒曜石	2.3	2.2	0.8	3.5	加工痕あり
S31	1 区	表土	石鏃	黒曜石	(2.6)	1.9	0.3	1.1	
S32	6 区	黒色土	石鏃		2.3	(1.8)	0.6	1.8	
S33	6 区	黒色土	石鏃	黒曜石	2.2	(1.5)	0.3	0.7	
S34	6 区	黒色土	石鏃	黒曜石	2.0	(1.7)	0.5	1.1	
S35	0 区	黒色土	石鏃	黒曜石	(2.1)	1.9	0.7	2.6	
S36	3 区	黒色土	不明	黒曜石	1.0	1.4	0.3	0.6	加工痕あり
S37	4 区	表土	剥片	黒曜石	2.9	1.7	0.4	1.9	
S38	2 区	黒色土	剥片	黒曜石	(3.2)	1.3	0.4	1.2	
S39	4 区	黒色土	磨製石斧		(5.0)	(3.1)	(0.45)	7.8	
S40	3 区	黒色土	すれ石		(5.6)	1.1	1.2	(10.0)	
S41	5 区	表土	磨製石斧		(12.0)	4.9	3.7	320.3	
S42	0－2 区	黒色土	打製土掘具		(9.6)	5.3	1.7	71.5	

吉谷銭神遺跡鉄関連遺物一覧表

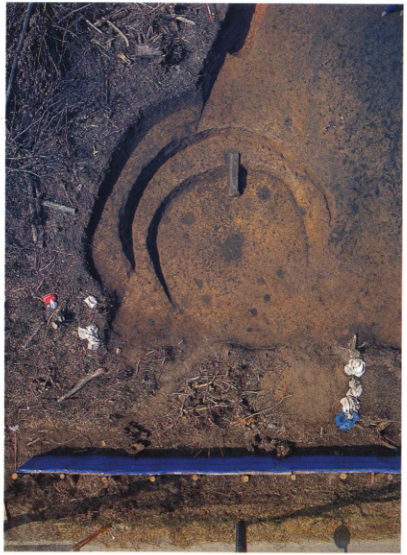
試料番号	出土地点	遺物種類	重量(g)	遒着度	メタル度	試料番号	出土地点	遺物種類	重量(g)	遒着度	メタル度
FS 1	不明遺構 2	椀形鍛冶滓(含鉄)	171.6	7	錆化(△)	FS45	4 区表土	含鉄鉄滓	18.9	7	錆化(△)
FS 2	0 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	33.8	7	M(◎)	FS46	4 区表土	含鉄鉄滓	6.7	4	錆化(△)
FS 3	0 区黒色土	含鉄鉄滓	35.6	5	L(●)	FS47	4 区表土	含鉄鉄滓	19.4	5	錆化(△)
FS 4	4 区黒色土	椀形鍛冶滓	42.8	4	なし	FS48	4 区黒色土	含鉄鉄滓	5.6	3	錆化(△)
FS 5	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	36.4	6	錆化(△)	FS49	4 区黒色土	含鉄鉄滓	11.4	4	錆化(△)
FS 6	4 区黒色土	含鉄鉄滓	48.8	8	L(●)	FS50	4 区表土	羽口溶解物	13.2	3	なし
FS 7	4 区黒色土	石	45.8	3	なし	FS51	4 区黒色土	含鉄鉄滓	11.5	4	錆化(△)
FS 8	4 区黒色土	含鉄鉄滓	18.6	6	錆化(△)	FS52	4 区黒色土	鉄滓	3.7	2	なし
FS 9	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	71.7	6	錆化(△)	FS53	4 区黒色土	含鉄鉄滓	3.6	3	錆化(△)
FS10	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	75.2	8	H(○)	FS54	4 区黒色土	椀形鍛冶滓	69.2	5	なし
FS11	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	44.0	6	錆化(△)	FS55	4 区黒色土	含鉄鉄滓	2.1	3	錆化(△)
FS12	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	64.0	6	錆化(△)	FS56	4 区黒色土	鉄滓	8.0	3	なし
FS13	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	126.1	8	錆化(△)	FS57	4 区黒色土	含鉄鉄滓	6.9	3	錆化(△)
FS14	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	64.6	5	なし	FS58	4 区黒色土	含鉄鉄滓	9.3	3	錆化(△)
FS15	4 区黒色土	鉄塊系遺物	18.8	3	M(◎)	FS59	4 区黒色土	椀形鍛冶滓	48.3	4	なし
FS16	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	38.2	7	錆化(△)	FS60	4 区黒色土	含鉄鉄滓	4.3	3	錆化(△)
FS17	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	35.2	4	錆化(△)	FS61	4 区黒色土	椀形鍛冶滓	87.7	7	なし
FS18	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	190.3	6	L(●)	FS62	4 区黒色土	含鉄鉄滓	21.9	5	錆化(△)
FS19	4 区黒色土	鉄器	18.6	4	錆化(△)	FS63	4 区黒色土	含鉄鉄滓	8.8	4	錆化(△)
FS20	4 区表土	鉄塊系遺物	12.3	5	L(●)	FS64	4 区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	76.5	6	H(○)
FS21	4 区表土	鉄滓	9.2	2	なし	FS65	4 区黒色土	含鉄鉄滓	25.3	6	錆化(△)
FS22	4 区表土	焼土片	9.2	1	なし	FS66	0－2区黒色土	椀形鍛冶滓(含鉄)	164.7	7	L(●)
FS23	4 区表土	含鉄鉄滓	11.4	4	L(●)	FS67	4 区表土	含鉄鉄滓	9.9	5	錆化(△)
FS24	4 区表土	含鉄鉄滓	8.1	4	錆化(△)	FS68	4 区表土	鉄滓	17.5	3	なし
FS25	4 区表土	焼土片	4.2	1	なし	FS69	4 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	73.9	6	錆化(△)
FS26	4 区表土	含鉄鉄滓	9.6	3	錆化(△)	FS70	5 区表土	鉄滓	0.6	2	なし
FS27	4 区表土	鉄滓	11.5	4	なし	FS71	5 区表土	含鉄鉄滓	3.7	4	錆化(△)
FS28	4 区表土	椀形鍛冶滓	96.7	6	L(●)	FS72	5 区表土	含鉄鉄滓	34.5	6	錆化(△)
FS29	4 区表土	含鉄鉄滓	11.4	5	錆化(△)	FS73	5 区表土	含鉄鉄滓	9.7	4	錆化(△)
FS30	4 区表土	椀形鍛冶滓	96.0	4	なし	FS74	5 区表土	含鉄鉄滓	5.1	4	錆化(△)
FS31	4 区表土	含鉄鉄滓	18.5	5	錆化(△)	FS75	0－2区黒色土	含鉄鉄滓	11.2	3	錆化(△)
FS32	4 区表土	椀形鍛冶滓	73.8	7	錆化(△)	FS76	5 区P116	鉄滓	4.3	3	なし
FS33	4 区表土	椀形鍛冶滓	56.1	3	なし	FS77	5 区P116	含鉄鉄滓	6.5	3	錆化(△)
FS34	4 区表土	含鉄鉄滓	24.8	7	M(◎)	FS78	5 区P116	鉄滓	14.4	3	なし
FS35	4 区表土	椀形鍛冶滓	20.5	2	なし	FS79	5 区P116	鉄滓	12.9	4	なし
FS36	4 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	97.1	7	錆化(△)	FS80	5 区P116	鉄滓	9.5	2	なし
FS37	4 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	66.4	9	錆化(△)	FS81	5 区P135	椀形鍛冶滓(含鉄)	61.3	7	錆化(△)
FS38	4 区黒色土	鉄滓	11.8	2	なし	FS82	5 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	139.9	5	L(●)
FS39	4 区表土	含鉄鉄滓	3.9	5	錆化(△)	FS83	P206	含鉄鉄滓	10.5	4	錆化(△)
FS40	4 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	23.4	6	錆化(△)	FS84	P206	含鉄鉄滓	5.5	3	錆化(△)
FS41	4 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	29.8	5	錆化(△)	FS85	P206	椀形鍛冶滓	260.8	6	なし
FS42	4 区表土	鉄塊系遺物	37.2	6	L(●)	FS86	表採	椀形鍛冶滓(含鉄)	22.8	5	錆化(△)
FS43	4 区表土	椀形鍛冶滓(含鉄)	37.2	7	錆化(△)	FS87	不明	鉄器	7.7	4	錆化(△)
FS44	4 区表土	椀形鍛冶滓	83.7	5	なし						

図　　版



遺跡上空より北を望む

遺跡上空より東を望む



竪穴住居２全景

テラス１、柵列全景

1、2区全景

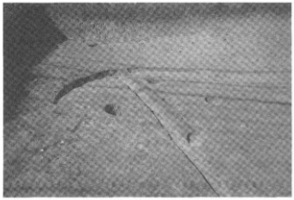
テラス1（南より）

図版4

磨製石剣（S 39）

墨書土器（Po91）

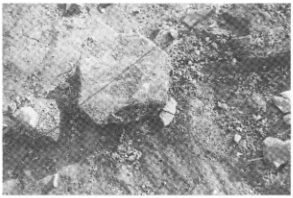
調査前風景（東より）



竪穴住居１完掘（南東より）

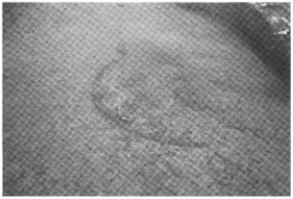
土層の堆積状況（調査区南東部）

０区全景（北より）

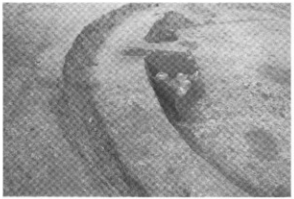


不明遺構１検出状況（北東より）

竪穴住居２検出（北より）



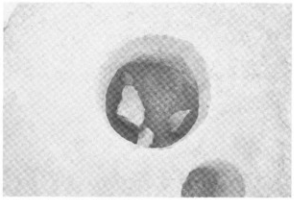
竪穴住居１検出（南より）



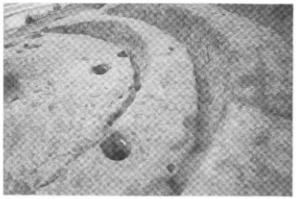
竪穴住居２遺物出土状況（南より）

図版6

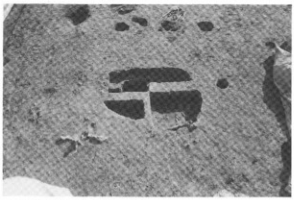
竪穴住居２完掘（南西より）



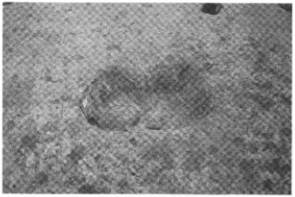
土坑３完掘（北東より）



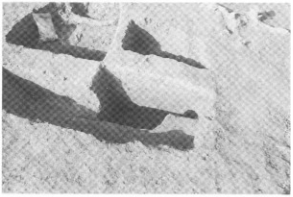
竪穴住居２切合状況（北より）



土坑１調査中（北より）

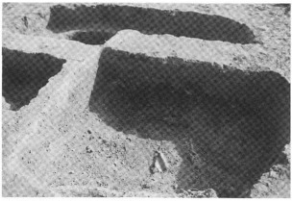


竪穴住居２中央ピット完掘（東より）



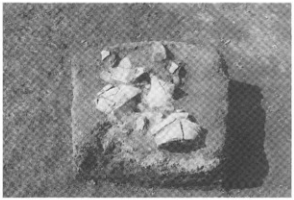
土坑１断面（南より）

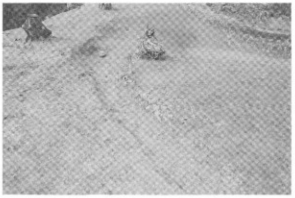
土坑２遺物出土状況（南西より）



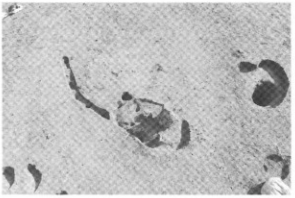
土坑１遺物出土状況（北より）

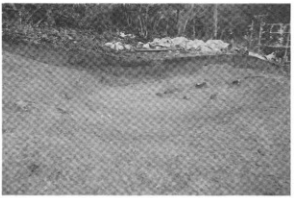
土坑1完掘（北より）


土器溜り1出土状況（南東より）

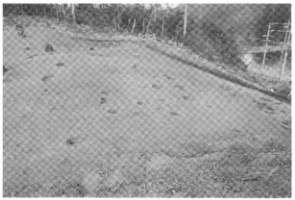

溝状遺構1完掘（南東より）

不明遺構2検出（北より）


溝状遺構2完掘（北東より）

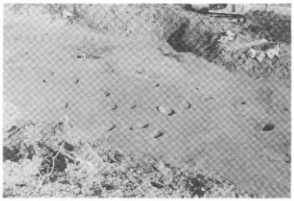

不明遺構2完掘（南より）

溝状遺構2遺物出土状況（東より）


1区完掘（南西より）

図版8

土器溜り2検出（東より）

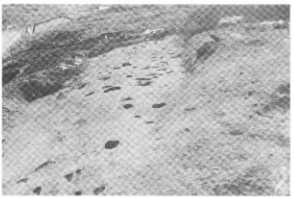


掘立柱建物3完掘（西より）

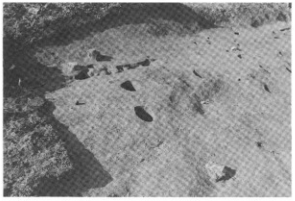
テラス1完掘（南より）

テラス1完掘（西より）

テラス1完掘（南東より）



テラス1完掘（北東より）



掘立柱建物2完掘（南より）

掘立柱建物2、3復元状況（北西より）

竪穴住居３完掘（東より）

掘立柱建物５完掘（西より）

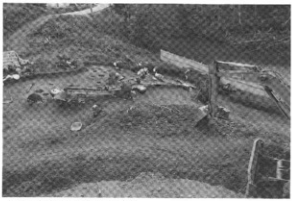
柵列１完掘（南より）

４区完掘（北より）

柵列１完掘（北より）

５区完掘（北より）

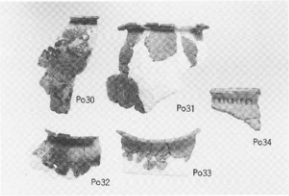
柵列３完掘（南より）



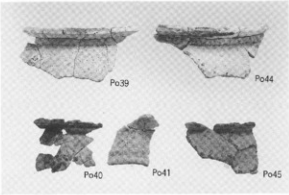
４区調査風景（北より）

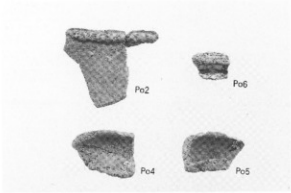
図版10

Po1

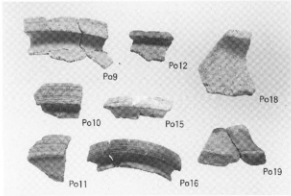

Po30
Po31
Po34
Po32
Po33

S4

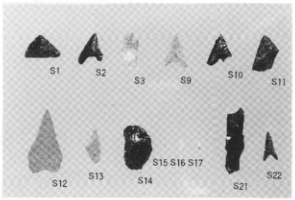

Po39
Po44
Po40
Po41
Po45

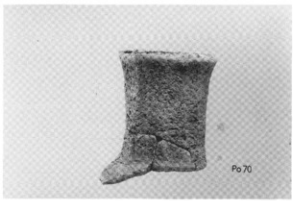

Po2
Po6
Po4
Po5

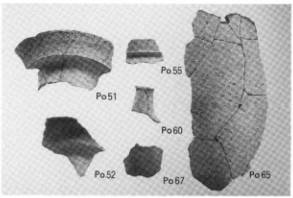
Po47

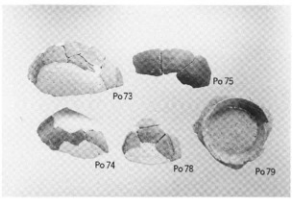

Po9
Po12
Po18
Po10
Po15
Po19
Po11
Po16

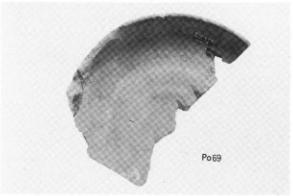
Po50

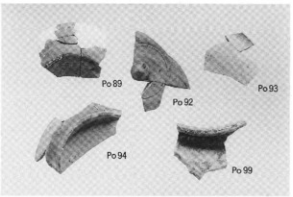

S1
S2
S3
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15 S16 S17
S21
S22


Po 70


Po 51
Po 55
Po 60
Po 52
Po 67
Po 65


Po 73
Po 75
Po 74
Po 78
Po 79

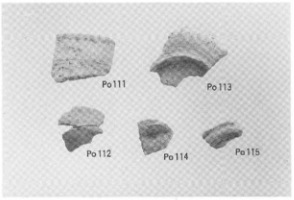

Po 69


Po 89
Po 92
Po 93
Po 94
Po 99

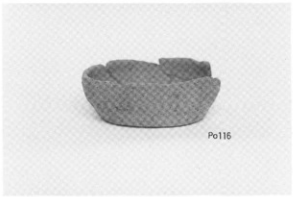
Po 69

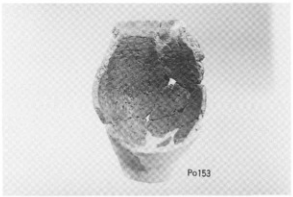
Po 91

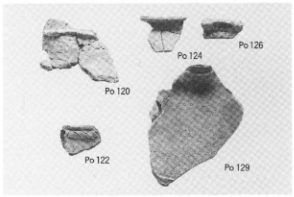
図版12

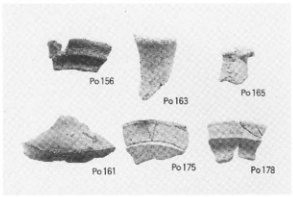

Po111
Po113
Po112
Po114
Po115

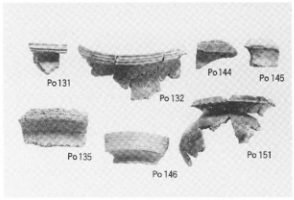
Po153

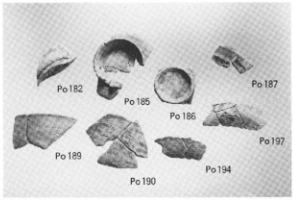

Po116


Po153

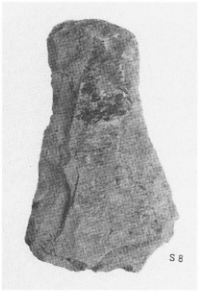

Po120
Po124
Po126
Po122
Po129

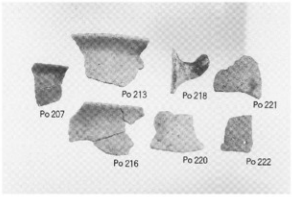

Po156
Po163
Po165
Po161
Po175
Po178

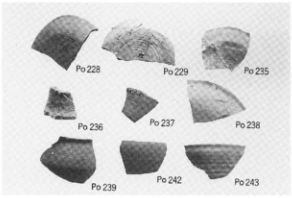

Po131
Po132
Po144
Po145
Po135
Po146
Po151

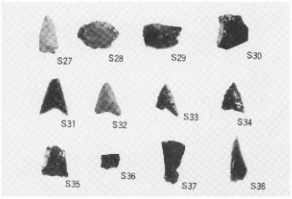

Po182
Po185
Po187
Po186
Po197
Po189
Po190
Po194

Po188


S 8

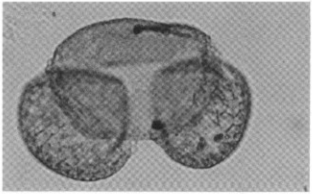

Po 207
Po 213
Po 218
Po 221
Po 216
Po 220
Po 222


Po 228
Po 229
Po 235
Po 236
Po 237
Po 238
Po 239
Po 242
Po 243


S27
S28
S29
S30
S31
S32
S33
S34
S35
S36
S37
S38

図版14

吉谷銭神遺跡の花粉・胞子



1　マツ属複維管束亜属

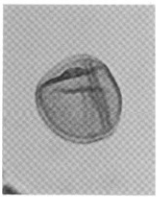
2　イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科

3　シイ属

4　コナラ属コナラ亜属

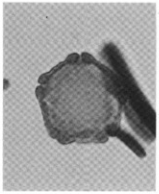
5　コナラ属アカガシ亜属

6　イネ科

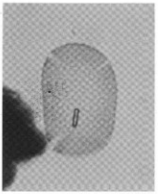


7　イネ科

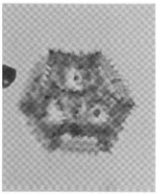
8　カヤツリグサ科



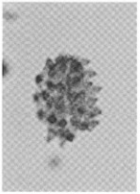
9　アリノトウグサ属ーフサモ属



10　ツリフネソウ属

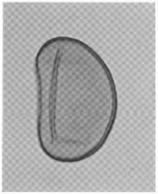


11　タンポポ亜科

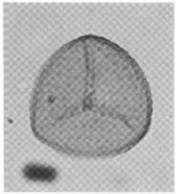


12　キク亜科

13　ヨモギ属



14　シダ植物単条溝胞子

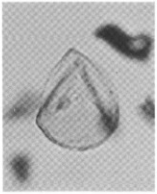


15　シダ植物三条溝胞子

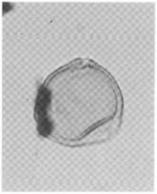
10μm

吉谷銭神遺跡の花粉・胞子

1　マツ属複維管束亜属



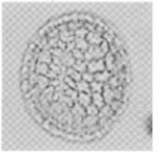
2　スギ



3　カバノキ属

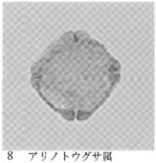
4　コナラ属コナラ亜属

5　コナラ属アカガシ亜属



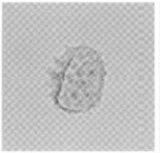
6　モクセイ科

7　イネ科



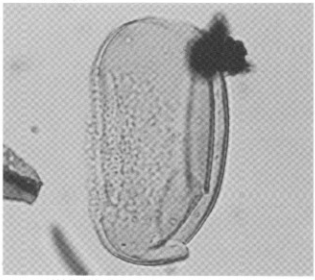
8　アリノトウグサ属
　　ーフサモ属

9　セリ亜科

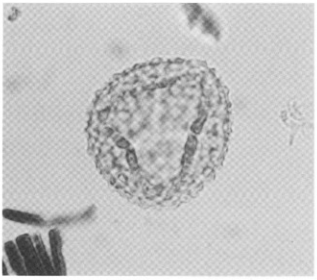


10　キク亜科

11　ヨモギ属



12　シダ植物単条溝胞子



13　シダ植物三条溝胞子

10μm

報告書抄録

ふりがな	よしたにぜにがみいせき Ⅰ
書名	吉谷銭神遺跡 Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	37
編著者名	佐伯純也
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
所在地	〒683−0822　鳥取県米子市中町20番地　TEL(0859)22−7209
発行年月日	西暦　2001年3月31日

ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	特記事項
よしたにぜにがみいせき 吉谷銭神遺跡	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 よしたに 吉谷	31202	2−394	35度 20分 50秒	133度 20分 21秒	2000年1月17日 ↓ 2001年3月31日	2900㎡	道路建設

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉谷銭神遺跡	集落跡	縄文～奈良、平安時代	竪穴住居、土坑、落し穴状土坑、溝状遺構、掘立柱建物跡、櫂列、不明遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、石器、鉄滓、磨製石剣、管玉、墨書土器	

(財) 米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書37

吉谷銭神遺跡 Ⅰ

2001年3月

編集・発行　財団法人米子市教育文化事業団

〒683−0822　鳥取県米子市中町20

印　刷　(株) 米子総合印刷センター